

浜松城下町遺跡

2017年3月

浜松市教育委員会



浜松城下町遺跡

Hamamatsu Castle Town Site

The 5th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2017

浜松市教育委員会



5次調査 全景(Ⅲ区、北東から)

卷頭図版 2



1 II区 全景(北から)



2 III区 全景(北から)



1 V区 全景（北東から）



2 V区 北壁土層堆積状況（南から）



3 V区 SK04遺物出土状況（東から）



4 V区 SD02完掘状況（西から）



1 城下町形成期の出土遺物



2 近世城下町の出土遺物

例　言

- 1 本書は浜松城下町遺跡（5次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国道257号の道路改良工事に先立ち実施した。発掘調査は浜松市（南土木整備事務所）の依頼により、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた国際文化財株式会社が担当した。調査にかかる費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかる面積と期間は、以下の通りである。

　　調査面積　　509.84 m²

　　委託期間　　平成28年（2016年）8月5日～平成29年（2017年）3月24日

　　　　　　　（うち現地調査期間　平成28年9月21日～11月30日）

- 4 調査は、和田達也（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、竹内俊之・閔美男（国際文化財株式会社）が担当し、人見太郎（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 5 本書の執筆は、第1章1～3、第3章を和田達也が、その他を閔が行った。現地調査における写真撮影は主に竹内・閔が行い、一部を和田が行った。遺物の写真撮影は亀井久美子（国際文化財株式会社）が行った。編集は閔が行い、中村祐一（国際文化財株式会社）が補佐した。
- 6 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市地域遺産センターで保管している。

凡　例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 土層・土器の色調は『標準土色帖2008』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 3 遺構番号は遺構の種類ごとに調査区単位で01号から順に付した。報告書中においてもこの番号を踏襲しているため、欠番も含まれている。
- 4 本書における遺構の略号は、以下のとおりである。
井戸（SE）、溝（SD）、土坑（SK）、小穴（SP）、その他遺構（SX）
- 5 本書における挿図の縮尺は各図中に明示したが、遺構図は1/60を基本とし、小穴は1/40で掲載した。遺物については1/4を基本とし、一部大型品を1/6、金属等小型品を1/2または1/1で掲載した。
- 6 遺物図の断面網掛けの使用例は、以下の通りである。
須恵器 ■■■ (K=100%)　　土師器・土師質土器 □□□　　陶器 ■■■ (K=40%)
磁器 ■■■ (K=20%)　　貿易陶磁器 ■■■ (K=60%)
- 7 本書では参考文献などの表記において、以下のような略称を用いる。
教育委員会→教委　(財)浜松市文化振興財團→浜文振　(財)浜松市文化協会→浜文協
- 8 本書の作成にあたり、以下の方々からご協力・ご指導を賜った。
藤澤良祐　堀内秀樹

浜松城下町遺跡

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯	1
2 浜松城下町遺跡をめぐる環境	2
3 調査の履歴	3
4 調査の方法と経過	5
第2章 調査成果	6
1 基本層位と遺構検出面	6
(1) 基本層位	6
(2) 遺構検出面	6
2 I 区の調査	7
(1) 概 要	7
(2) 城下町にかかわる遺構と遺物	7
(3) 小 結	10
3 II 区の調査	11
(1) 概 要	11
(2) 城下町にかかわる遺構と遺物	12
(3) 小 結	17
4 III 区の調査	18
(1) 概 要	18
(2) 鎌倉時代以前の遺構と遺物	18
(3) 城下町にかかわる遺構と遺物	20
(4) 小 結	27
5 IV 区の調査	28
(1) 概 要	28
(2) 城下町にかかわる遺構と遺物	29
(3) 小 結	30
6 V 区の調査	31
(1) 概 要	31
(2) 鎌倉時代以前の遺構と遺物	32
(3) 城下町にかかわる遺構と遺物	33
(4) 小 結	38
出土遺物観察表	39
第3章 総 括	42
(1) 発掘調査の成果	42
(2) 発掘調査の意義と展望	42

図 版

卷頭図版

- 1 5次調査 全景(Ⅲ区、北東から)
- 2 1 Ⅱ区 全景(北から)
 - 2 Ⅲ区 全景(北から)
- 3 1 V区 全景(北東から)
 - 2 V区 北壁土層堆積状況(南から)
 - 3 V区 SK04遺物出土状況(東から)
 - 4 V区 SD02完掘状況(西から)
- 4 1 城下町形成期の出土遺物
 - 2 近世城下町の出土遺物

図 版

- PL.1 Ⅲ区 全景(北東から)
- PL.2 1 I区 南半完掘全景(南から)
 - 2 I区 北半完掘全景(南西から)
 - 3 I区 SX01土層堆積状況(東から)
 - 4 I区 SE02土層堆積状況(南西から)
- PL.3 1 II区 完掘全景(北から)
 - 2 II区 SD01完掘状況(南から)
 - 3 II区 SK05遺物出土状況・完掘状況(南から)
- PL.4 1 II区 SK06遺物出土状況(南から)
 - 2 II区 SK10(左) SK09(右)完掘状況(南東から)
 - 3 II区 SX01完掘状況(東から)
 - 4 II区 SX02検出状況(南から)
- PL.5 1 Ⅲ区 完掘全景(北から)
 - 2 Ⅲ区 完掘全景(南から)
- PL.6 1 Ⅲ区 西壁土層堆積状況中央部(東から)
 - 2 Ⅲ区 SK05遺物出土状況(北から)
 - 3 Ⅲ区 SK24完掘状況(東から)
 - 4 Ⅲ区 SX01完掘状況(西から)
 - 5 Ⅲ区 SX02完掘状況(南から)
- PL.7 1 IV区 完掘全景(北から)
 - 2 IV区 西壁土層堆積状況(東から)
 - 3 IV区 SK01遺物出土状況(北から)
- PL.8 1 V区 完掘全景(北東から)
 - 2 V区 北壁土層堆積状況(南から)

- PL.9 1 V区 東壁土層堆積状況（南西から）
 2 V区 SD02完掘状況（西から）
 3 V区 SK04遺物出土状況（南から）
 4 V区 SP12遺物出土状況（東から）
- PL.10 1 I区 出土遺物
 2 II区 出土遺物（1）
- PL.11 II区 出土遺物（2）
- PL.12 III区 出土遺物（1）
- PL.13 III区 出土遺物（2）
- PL.14 1 IV区 出土遺物
 2 V区 出土遺物（1）
- PL.15 V区 出土遺物（2）
- PL.16 V区 出土遺物（3）

挿図目次

Fig.1	浜松城下町遺跡の位置	1
Fig.2	近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴	4
Fig.3	浜松城下町遺跡 5次全体図	5
Fig.4	土層堆積状況模式図	6
Fig.5	I区 全体図・東壁断面図	8
Fig.6	I区 道構詳細図	9
Fig.7	I区 出土遺物	10
Fig.8	II区 全体図・西壁断面図	11
Fig.9	II区 道構詳細図（1）	13
Fig.10	II区 道構詳細図（2）	14
Fig.11	II区 出土遺物（1）	16
Fig.12	II区 出土遺物（2）	17
Fig.13	III区 西壁・南壁断面図	18
Fig.14	III区 全体図	19
Fig.15	III区 鎌倉時代以前の道構詳細図	20
Fig.16	III区 鎌倉時代以前の出土遺物	20
Fig.17	III区 城下町にかかわる道構詳細図（1）	23
Fig.18	III区 城下町にかかわる道構詳細図（2）	24
Fig.19	III区 城下町にかかわる道構詳細図（3）	25
Fig.20	III区 城下町にかかわる出土遺物（1）	26
Fig.21	III区 城下町にかかわる出土遺物（2）	27
Fig.22	IV区 全体図・西壁断面図	28
Fig.23	IV区 道構詳細図	29
Fig.24	IV区 出土遺物	30
Fig.25	V区 全体図	31

Fig.26	V区 北壁・東壁断面図	32
Fig.27	V区 鎌倉時代以前の遺構詳細図	32
Fig.28	V区 鎌倉時代以前出土遺物	33
Fig.29	V区 城下町にかかわる遺構詳細図	35
Fig.30	V区 城下町にかかわる出土遺物（1）	36
Fig.31	V区 城下町にかかわる出土遺物（2）	37
Fig.32	V区 城下町にかかわる出土遺物（3）	38

挿表目次

Tab.1	出土遺物観察表	39
-------	---------	----

第1章 序論

1 調査に至る経緯

浜松城下町遺跡は、静岡県浜松市の中心部に位置し、現在の中心市街地形成の基礎になった遺跡である。現在は、市街地化が進行し、城下町の景観の多くは失われているが、部分的に近世の城下町の痕跡が街区や地形、水路として残存している。

近年、近世の東海道をもとに整備された国道257号とその周辺道路において、交通集中に関わる課題が浮上し、解決が求められてきた。これらの課題解決にあたり、車道拡幅を主とした道路の改良工事が計画された。この計画のもと、工事を主管する浜松市（南土木整備事務所）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が遺跡の取り扱いについて協議し、対象地のうち道路拡幅部分において、遺構や遺物の残存状態を把握するための確認調査を2016年12月15日・16日の2日間に渡り実施した。確認調査により遺跡の遺存が認められた部分において、その遺跡の保存について協議し、記録保存を目的とした本発掘調査を実施することを決定した。

本発掘調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行った。実務は、浜松市から業務を受託した国際文化財株式会社が実施した。現地調査は、2016年9月21日から2016年11月30日にかけて実施した。調査面積は約510 m²である。

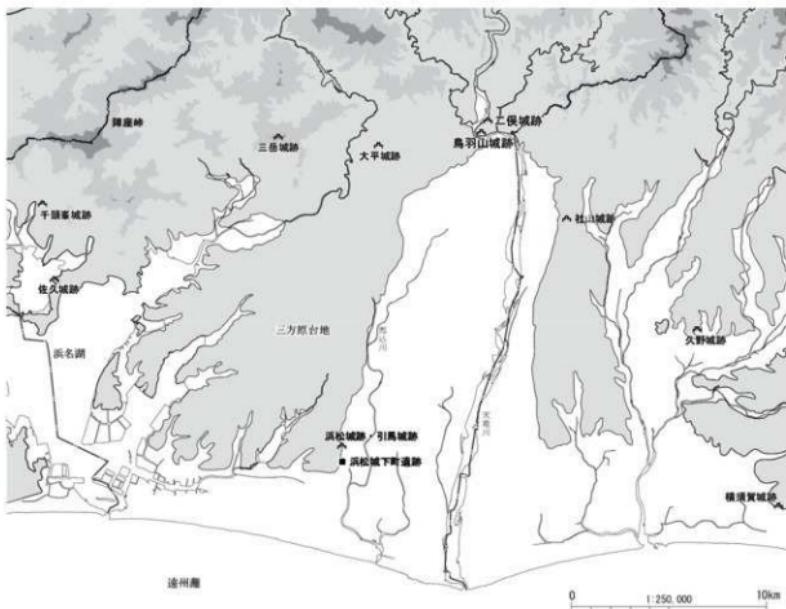


Fig.1 浜松城下町遺跡の位置

2 浜松城下町遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

浜松城下町遺跡は、三方原台地の東縁部に位置する浜松城跡を中心に、天竜川により形成された河岸段丘とその段丘低位面に展開する。遺跡の範囲は、東西1.8km、南北1.5kmにおよび、面積は1,710,000m²である。浜松城下町遺跡の周囲には、北と南に湿地が広がり、東端は天竜川の分流である馬込川が流れ、西には三方原台地の東縁部が広がっている。

(2) 歴史的環境

原始・古代 浜松城跡及び浜松城下町遺跡とその周辺において原始から古代に至る集落遺跡は確認できていないが、後期古墳や横穴墓が展開していることが知られる。浜松城下町遺跡におけるこれまでの発掘調査でも、須恵器が一定量出土しており、古代の集落が展開していた蓋然性が高い。

中世 浜松城下町遺跡の原型となる中世の宿町（引馬宿）が、馬込川と東海道の結節点に展開していた。引馬宿の形成は鎌倉時代に遡り、『梅花無尽藏』には「引馬、市は富み、屋は千区」と記されており、都市的な景観が広がっていたことがうかがえる。引馬宿の中心地は、「曳馬捨遺」には「野口村、八幡村、早馬、元黙などの“元はま松”がかつての引馬の駅といわれた所である」とあり、現在の中区早馬町から中区八幡町にかけての一帯にあたる。浜松城下町遺跡の北東側を中心とし、北東方向から南西方向に延びる、近世城下町とは異なる区画が認められる（太田1996）。浜松城の前身といわれる引馬城が付随し、近世浜松城で「古城」とされた部分にあたる。引馬城は、吉良氏が浜松荘を領有した際、被官の巨見新左衛門尉によって築造された（宗長日記）。15世紀には浜松城の前身となる引馬城の整備が進められていたとみられる。引馬城の北側には「椿屋敷」や「蛇屋敷」などの土地がみられ、このころに家臣団の屋敷地があったと想定できる。

元亀元年（1570）、徳川家康が引馬城に入城し、浜松城として拡張をはじめた。浜松城を中心として家臣団や商工業者の居住地が整備された。『遠江国風土記伝』には、五大神社（旧城内二の丸から利町）、松尾社（旧塙市口から元魚町）、神明社（旧城内の南面から高町）などの寺社の移転を紹介する記載があり、天正年間に城下町の南部へ移転した寺社が多くみられる。これは徳川段階における城下町の範囲を示す情報として注目できる。天正18年（1590）、堀尾吉晴が浜松城へ入城し、高石垣や瓦葺建物が整備されたとされる（加藤1994）。堀尾期の城下町の様相は明らかでないが、浜松城の天守や天守門の配置は、東側に位置する旧来の宿町からの視線を意識したものと捉えられる。

近世 慶長5年（1600）、堀尾吉晴が出雲へ移り、浜松城は譜代大名が治めるようになる。17世紀前半以降の浜松城や城下町の様相は、絵図など史・資料からうかがい知ることができる。浜松城は織豊系城郭から近世城郭へと大規模な改修が行われ、南向きの城郭へと変貌するとともに、東海道の移設を含め、城下町も大規模な改変が行われた（太田1996）。今回の発掘調査区は、この近世城下町の南端部分にあたる。「遠江浜松城下絵図」には、城下町の南口にあたる部分に木戸や南番所が配置され、東海道沿いには東側に町人地、西側には町人地にまじり寺社地がみられる。

近現代 明治6年（1873）の廃城令によって、浜松城の建造物は解体され、土地は払い下げられ大規模な地形改変が行われた。城下町の景観は、戦前まで維持されたが、戦災によりその多くが失われた。戦後復興に伴い、戦前の街区を踏襲しつつも道幅の拡幅や街区の再整備が行われている。

3 浜松城下町遺跡の調査履歴

(1) 発掘調査成果と遺跡の内容・名称の見直し

浜松市文化財課では、「浜松城下町遺跡」の大部分を従来、中世都市「ひくま」の推定地である「旧引間宿推定地」と近世浜松城の城下町と宿場町を対象とした「旧浜松宿」の2つの異なる遺跡として埋蔵文化財包蔵地として登録・周知してきた。しかし、後述する1～3次発掘調査の成果から、遺跡の範囲と内容について見直しを行う必要が生じた。検討を重ねた結果、従来の「旧引間宿推定地」・「旧浜松宿」と古記録からうかがい知ることができる武家町を総括し、ひとつの遺跡として扱うことが適切と判断し、平成28年2月に遺跡の名称を「浜松城下町遺跡」へ変更した。

(2) 発掘調査

浜松城下町遺跡では2017年3月までに、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）によつて、7回にわたる発掘調査が実施されている。このうち2次調査および5次調査は本発掘調査、そのほかは開発に伴い事前に実施した確認調査である。

1・2次調査 県道68号線（植松和地線）の拡幅工事に伴い中区元浜町・八幡町にて実施した発掘調査である。1次調査は、平成27年（2015）に実施した確認調査、2次調査は、1次調査の結果を受けて平成27年12月に実施した本発掘調査である。戦国時代や江戸時代を中心とした遺構や遺物が出土した。これらの調査により確認できた遺構や遺物は、周辺に展開した蛇屋敷や椿屋敷などの武家地に関わるものである可能性が指摘されている（浜松市教委2017）。

3次調査 国道257号の拡幅工事に伴い平成27年12月に中区成子町から中区塩町にかけて実施した確認調査である。浜松城下町遺跡の南端部に近世城下町に関わる情報が良好な状態で残存していることが確認された初めての調査である。出土遺物から、浜松城に付随する城下町南部の形成時期が16世紀後半に遡る可能性が示された。3次調査区は、5次調査区（本発掘調査）に重複する部分であるため、本書の第2章にて報告する。

4次調査 県道68号線（植松和地線）の拡幅工事に伴い中区元城町・元目町において実施した確認調査である。1・2次調査の西側延長部分の調査であったが、鎌倉時代から江戸時代の遺物が少量出土したもの、遺構は確認されなかった。土層の堆積状況から、低地や湿地であったことか判明し、遺跡の希薄な地点であると捉えられる（浜松市教委2017）。

5次調査 3次調査の結果を受けて平成28年9月から11月にかけて実施した本発掘調査である。江戸時代を中心とした時期の城下町南部地域に関わる情報が得られた。また、奈良時代や鎌倉時代に遡る出土品も一定量みられ、城下町形成以前の浜松の様相をうかがい知る上でも重要な成果を得た。詳細は、第2章にて報告する。

6次調査 平成28年6月に中区常盤町に所在する分器稻荷の東側隣接地におけるマンション建設に先立って実施した確認調査である。地表下2mまで掘削し、基盤層の確認を試みたが、近現代の整地層の検出にとどまり、遺構・遺物は認められなかった。後世の地形変更により遺跡が失われた地点と捉えられる。

7次調査 平成28年8月から9月の間に中区塩町から中区旅籠町の範囲で、国道257号の拡幅工事に先立ち実施した確認調査である。良好な状態で遺跡が残存している地点が確認できた。近世城下町に関わる情報が、市街地の下に残存していることが明らかになった。

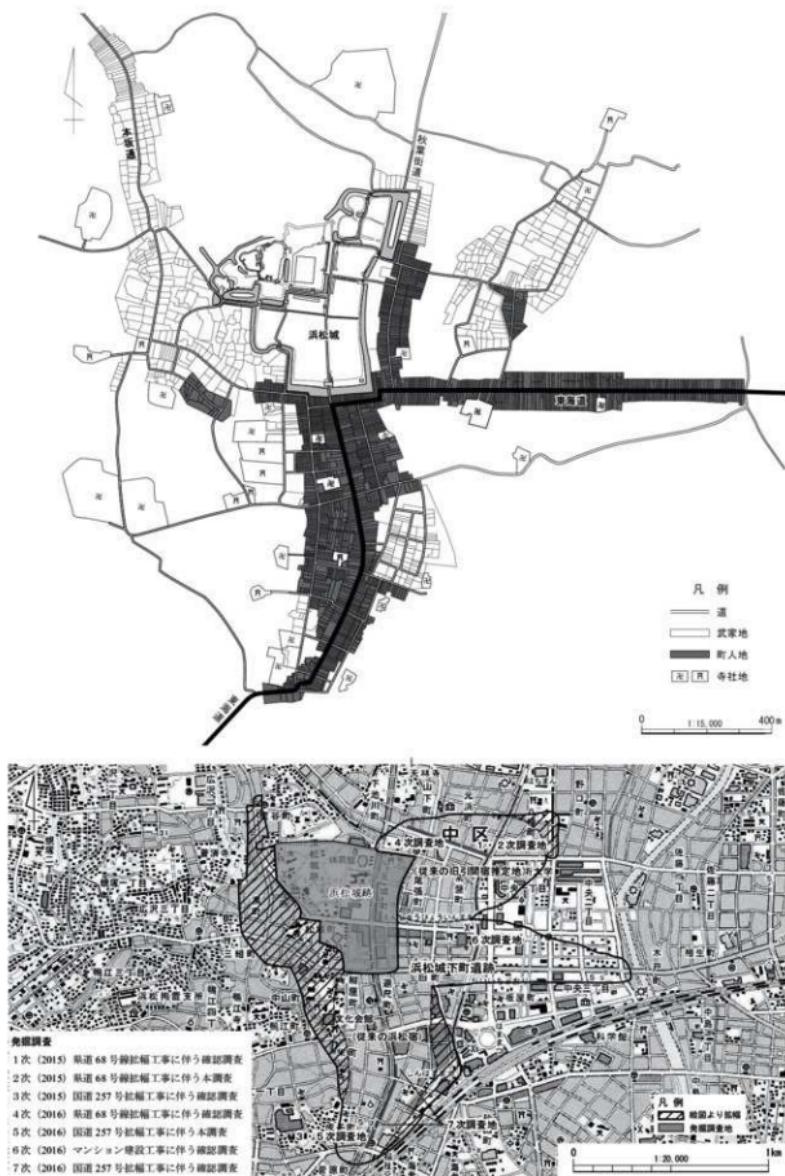


Fig.2 近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴

4 調査の方法と経過

調査の方法は、表土・擾乱層を重機で掘削した後、地山（基盤層）まで人力で掘削しながら遺構検出を行った。その際に、現在も使用されているガス管、排水管については破損することを避けるため、周囲の土を残して調査した。また、道路及び人家がごく近いため、掘削深度が1.5mを超えるような場合には、調査区から約1m内側に控えをとり、安全確保に努めた。これらの理由により、完掘できなかった遺構が各調査区にある。検出した遺構は基本的に長軸方向に半截し、土層断面の写真・図面・土層観察の記録をとった後、もう半分を掘削して完掘し、平面図作成と完掘写真を撮影した。出土遺物の取上げは、包含層では層位ごとに、遺構では個体ごとに取上げた。特に残存状態の良好な遺物が出土した場合は、出土状況の写真を撮影し、平面図および断面見通し図を作成した。各種図面の作成には光波トランシットを使用した。写真撮影は6×7判のフィルムカメラ（モノクロネガ、カラーリバーサル）とデジタルカメラ（1420万画素）を用いて行った。

調査は、平成28年9月21日から開始し、11月30日に終了した。排土置き場の関係から、最初にI区・V区を併行してを行い、その後II区→IV区→III区の順で実施した。

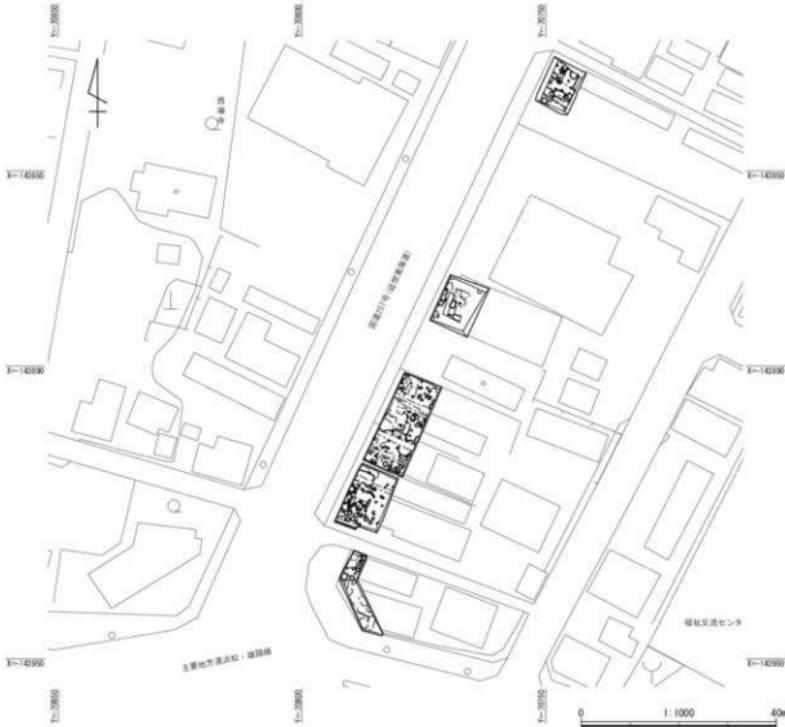


Fig.3 浜松城下町遺跡5次全体図

第2章 調査成果

1 基本層位と遺構検出面

(1) 基本層位

浜松城下町遺跡は、近代以降の市街地化に伴い、それ以前の堆積層の大部分が失われている。今回の発掘調査で確認できた土層は、表土・擾乱の直下に基盤層がみられる調査区もしくは、表土・擾乱と基盤層の間に1層の自然堆積層(中世～近世)が認められる調査区がほとんどであった。同一面で構造物の更新が図られたためと捉えられる。いっぽう、5次調査対象地北端にあたるV区では、4面以上の整地面(遺構面)を認識できた。V区は基盤層がI～IV区に比べ相対的に低かったため、現況の地表面に達するまでの情報が良好な状態で残存したとみられる。ここではV区の土層堆積状況を概観し、浜松城下町遺跡の基本的な層位とその時期についてまとめる。

V区の堆積状況 V区の土層堆積状況は、表土・擾乱(1～2層)、整地面A(3層上面)、整地面B(8～11層の上面)とその上に堆積した土層(4～7層)、整地面C(15～17層の上面)とその上に堆積した(12～14層)、そして最下層の基盤層(18層)がある。

基盤層上で検出できた遺構からは北宋錢や山茶碗が出土しており、平安時代から鎌倉時代を中心としたものと捉えられる。

整地面Aは、その整地層である3層に多くの遺物が含まれていた。3層から出土した遺物のうちもっとも新しい遺物は、登窯第6・7小期(18世紀前半)のものと捉えられる尾呂茶碗(Fig.31-138)である。このことから、整地面Aの造成時期は、18世紀前半以降と捉えることができる。

整地面B・Cは土層断面の観察により判別が可能である。整地面B・Cに伴う遺構は、上層に擾乱の影響がみられ、整地面Bと整地面Cに伴う遺構を峻別することはできなかった。整地面B・Cに伴う遺構埋土から出土した遺物の時期は、大窯3段階後半(16世紀後葉)から登窯第6小期のものであった。このことから、整地面Cの形成時期は16世紀後葉と捉えられる。整地面Bの形成時期は、7層中から出土した登窯第4小期(17世紀後葉)の遺物(Fig.31-135)が注目できる。

(2) 遺構検出面

遺構検出作業は、すべての調査区において基盤層上面にて実施した。V区では土層断面の観察により調査4面の遺構面を確認したが、平面では、複数時期の遺構が切り合っている点や後世の擾乱が顕著なことから、各遺構面の平面的な検出は困難であった。

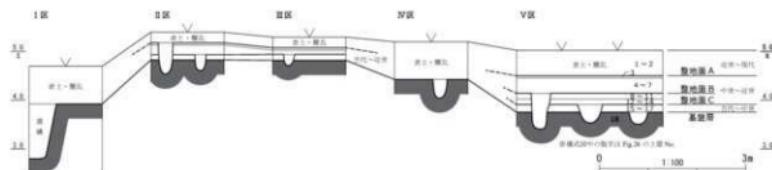


Fig.4 土層堆積状況模式図

2 I 区の調査

(1) 概要

I 区は本遺跡の最南端に位置する。遺構は井戸跡2基、土坑2基、その他の遺構1基、ピット6基を検出した。城下町の南端にあたっているが、調査区全体を近代以降に大きく搅乱されており、良好とはいえない残存状態であった。

(2) 城下町にかかる遺構と遺物

i) 井戸跡

SE01 (Fig.6) 調査区北側西端に位置する。平面形は円形、断面はほぼ垂直に掘り込まれる。重複関係はない。規模は長軸0.93m、短軸0.86m、深さ1.82mを測る。長軸方向はN-69°-Wである。素掘りの井戸であるが、安全面を考慮し、底面までの掘削は断念した。

SE01出土遺物 (Fig.7) 遺物は埋土上層から、多量の陶磁器、瓦が出土しているため、廃絶時にまとめて捨てたものと考えられる。6点を図示した。1は肥前産の磁器端反碗で、焼締痕・焼維印が認められる。19世紀前葉と考えられる。2は瀬戸・美濃産磁器の広東碗で、登窯第10小期、19世紀前～中葉と考えられる。3は肥前産の磁器小皿で、見込みに五弁花印（コンニャク判）がみられ、煤が付着する。18世紀後半と考えられる。4は瀬戸・美濃産陶器のお神酒徳利で、登窯第9小期、19世紀前半と考えられる。5は土師器の火鉢で、肩部に焼成前の穿孔がみられる。内面には多量の煤が付着しており、使用頻度が高かったことがうかがわれる。6は大型の砥石で、各面に擦痕がみられる。石材は粘板岩である。SE01の時期は、出土遺物の特徴から18世紀後半～19世紀中葉と考えられる。

SE02 (Fig.6) 調査区北側中央に位置する。平面形は梢円形、断面はほぼ垂直に掘り込まれる。重複関係はない。規模は長軸1.50m、短軸1.30m、深さ3.92mを測る。長軸方向はN-6°-Eである。素掘りの井戸である。部分的に段堀りし、検出面から約4mまで掘削したが、安全面を考慮し、底面までの掘削は断念した。なお標高0.65m付近で、湧水が認められた。

SE02出土遺物 (Fig.7) 遺物は、ごく少量の陶磁器、瓦が出土した。うち3点を図示した。7は肥前産磁器の中碗（くらわんか手）で、18世紀後半と考えられる。8は肥前産磁器の半筒碗で、見込みに手書きの五弁花印がみとめられる。18世紀後半と考えられる。9は美濃産陶器の徳利で、やや焼成不良である。19世紀と考えられる。SE02の時期は、出土遺物の特徴から18世紀後半～19世紀と考えられる。

ii) 土坑

SK01 (Fig.6) 調査区北東端に位置し、遺構東側は調査区外に延びる。平面形は梢円形と推定され、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.13m、短軸0.47m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-26°-Eである。遺物は出土していない。SK01の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK02 (Fig.6) 調査区北東端に位置し、遺構東側は調査区外にわずかに延びる。平面形は梢円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.98m、短軸0.76m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN-67°-Eである。遺物は図示していないが、陶器片が出土している。SK02の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

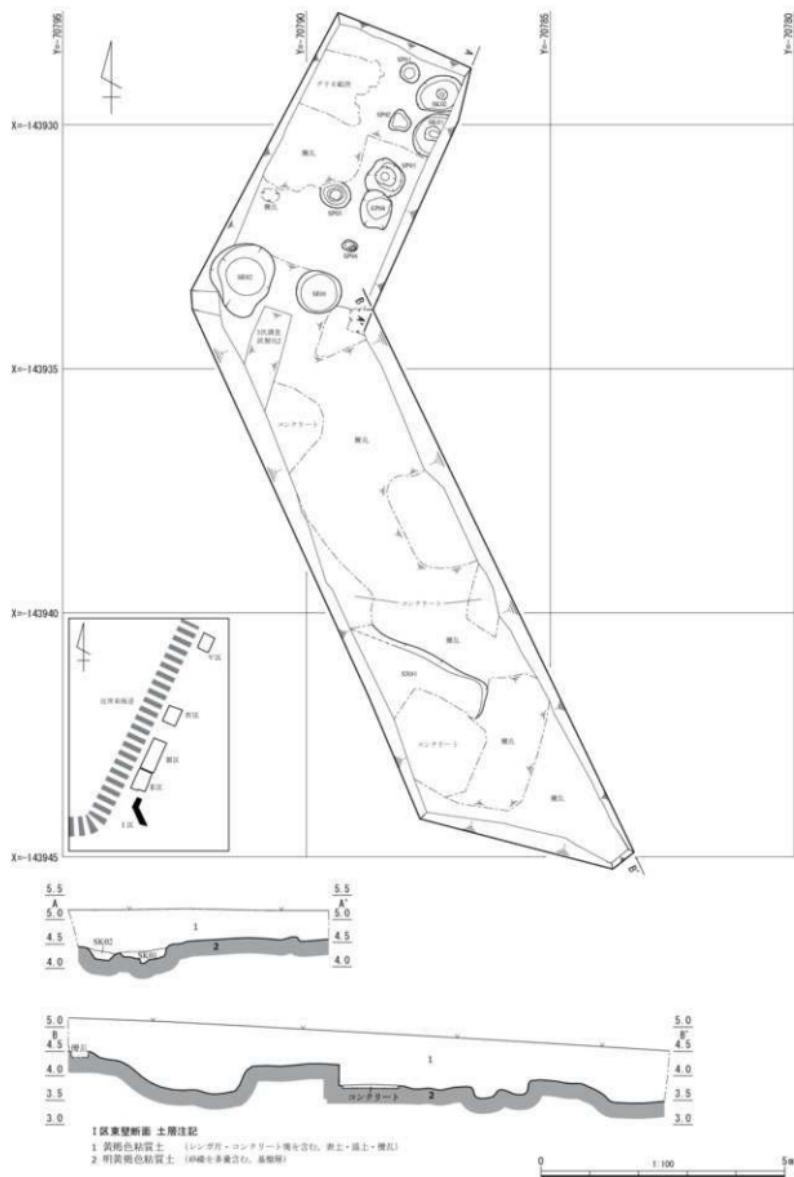


Fig.5 I区全体図・東壁断面図

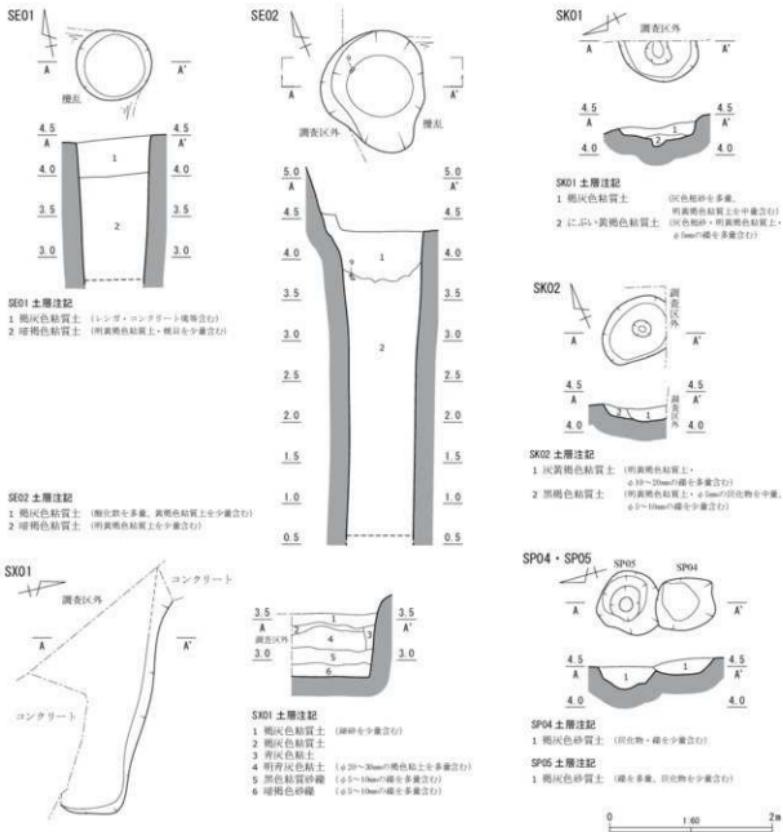


Fig.6 I区 遺構詳細図

iii) 不明遺構

SX01 (Fig.6) 調査区南東側に位置し、遺構西側は調査区外に延びる。平面形は長方形と推定され、断面形は箱形を呈する。重複関係はない。規模は長軸2.74m、短軸1.09m、深さ1.00mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。遺物は図示していないが、陶器片が出土している。

SX01出土遺物 (Fig.7) 遺物は、3次調査で出土した遺物のうち、本遺構に伴うもの1点を図示した。10は瀬戸産陶器の輪禿皿で、登窯第5小期、17世紀後葉と考えられる。SX01の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後葉と考えられる。

iv) 小穴

SP05 (Fig.6) 調査区北側や東寄りに位置する。平面形は不整円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はSP04に切られる。規模は長軸0.80m、短軸0.79m、深さ0.31mを測る。長軸方向はN-84°-Eである。



Fig.7 I区出土遺物

SP05出土遺物 (Fig.7) 1点を図示した。IIは肥前産の京焼風陶器碗で、刻印は「清水」の「水」部分と考えられる。SP05の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後葉と考えられる。

遺構外出土遺物 (Fig.7) 3次調査時で出土した遺物のうち、3点を図示した。12は美濃産陶器の丸碗で、登窯第5～6小期、17世紀後葉～18世紀前葉と考えられる。13は瀬戸・美濃産陶器の鉄絵皿で、登窯第1小期、17世紀初頭と考えられる。14は瀬戸・美濃産陶器の大皿で、登窯第1～2小期、17世紀前葉と考えられる。

(3) 小結

I区は調査区の大半を近代以降の擾乱により消失しており、検出された遺構も少ないため、当時の様子を復元することは困難である。ただ、近世東海道の近くに位置しながらも、SE01・02といった井戸が存在するということは、当該地が町家の範囲に含まれていたことの傍証となる。出土遺物からは、この2つの井戸の廃絶時期に明確な差異は認められなかった。また、SX01については、城下町の南端に位置し、豊穴状を呈することから、木戸にかかる施設であった可能性が指摘できるが、遺存状況から遺構の復元は困難である。

3 II区の調査

(1) 概要

II区はI区の北側に位置し、III区の南側に隣接する。遺構は構造遺構2条、土坑10基、その他の遺構2基、ピット69基を検出した。調査区東側は、擾乱が顕著である。また地下埋設物により一部調査が不可能な遺構もあった。

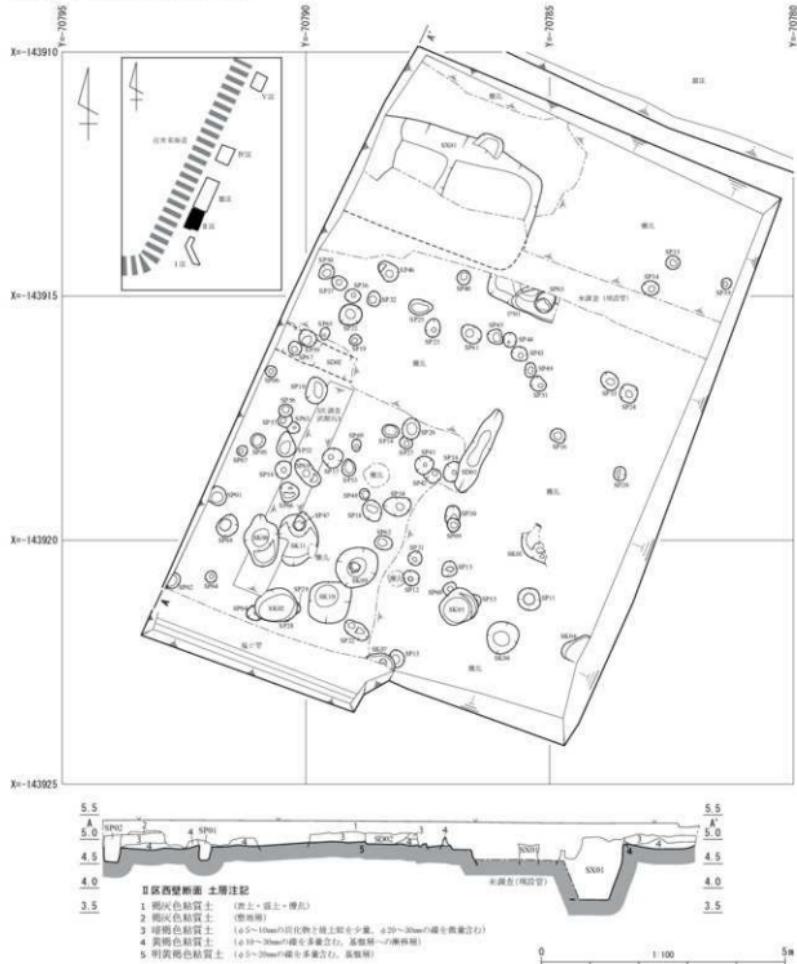


Fig.8 II区 全体図・西壁断面図

(2) 城下町にかかる遺構と遺物

i) 構造遺構

SD01 (Fig.9) 調査区中央に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はSP38を切る。規模は長軸1.85m、短軸0.36m、深さ0.56mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。残存範囲は小さいものの、形状と土層の堆積状況から、溝状遺構と判断した。

SD01出土遺物 (Fig.11) 遺物は土師器、陶磁器が出土しており、うち9点を図示した。15は肥前産京焼風陶器の碗で、17世紀後葉と考えられる。16は瀬戸・美濃産陶器の黄瀬戸大皿で、17世紀前～中葉と考えられる。17は瀬戸・美濃産陶器の擂鉢で、17世紀後半と考えられる。18は土師器の灯明皿である。19は土師器の焰烙で、17世紀前半と考えられる。20は時期不明の火鉢である。21・22はかわらけである。23は丸瓦である。24は煙管の吸口である。SD01の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後半と考えられる。

SD02 (Fig.9) 調査区中央西側に位置し、調査区外へ延びる。調査区壁面で確認したため平面形は不明だが、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP59・67に切られる。規模は長軸1.63m、短軸0.93m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN-64°-Wである。遺物は出土していない。SD02の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

ii) 土坑

SK01 (Fig.9) 調査区南東側に位置する。平面形は楕円形と推定され、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.75m、短軸0.61m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-34°-Wである。

SK01出土遺物 (Fig.11) 1点を図示した。25は瀬戸・美濃産陶器の折縁皿で、大窯第4段階前半と考えられる。SK01の時期は、出土遺物の特徴から16世紀後半と考えられる。

SK02 (Fig.9) 調査区南西端に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP04を切る。規模は長軸0.85m、短軸0.69m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-67°-Eである。遺物は出土していない。SK02の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK04 (Fig.9) 調査区南東端に位置し、遺構西側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形と推測され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.61m、短軸0.40m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。遺物は出土していない。SK04の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK05 (Fig.9) 調査区南東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はSP55・60を切る。規模は長軸0.77m、短軸0.66m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN-59°-Eである。遺物は陶磁器のほか、24点4252.0gの鉄滓が出土している。

SK05出土遺物 (Fig.11) 7点を図示した。26は美濃産陶器の拳骨茶碗で、登窯第6～7小期、18世紀前半～中葉と考えられる。27は土師器の焰烙である。28～32は碗形滓である。SK05の時期は、出土遺物の特徴から18世紀前半～中葉と考えられる。

SK06 (Fig.9) 調査区南東側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.68m、短軸0.63m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN-20°-Eである。底面から甕が出土している。

SK06出土遺物 (Fig.12) 2点を図示した。33は常滑産陶器の甕である。34はかわらけである。SK06の時期は、出土遺物の特徴から近世と捉えられる。

SK07 (Fig.9) 調査区南端に位置し、遺構南側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形と推定され、

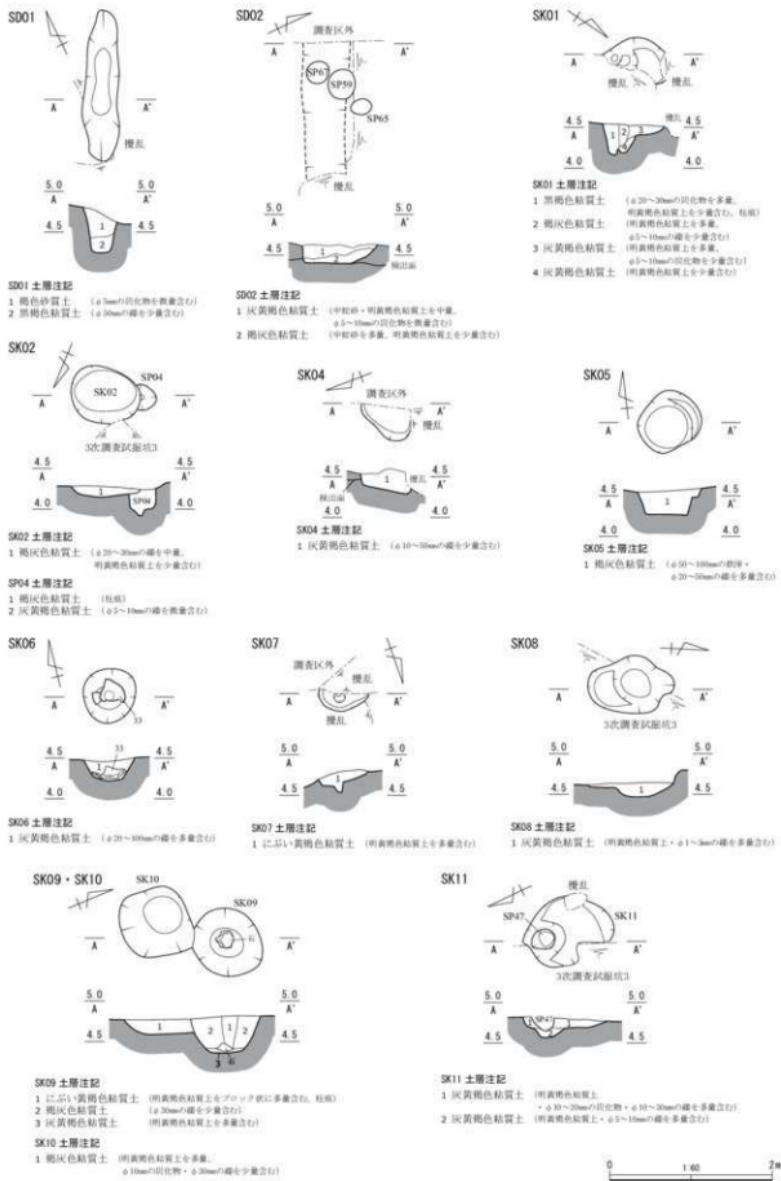


Fig.9 II区 遺構詳細図(1)

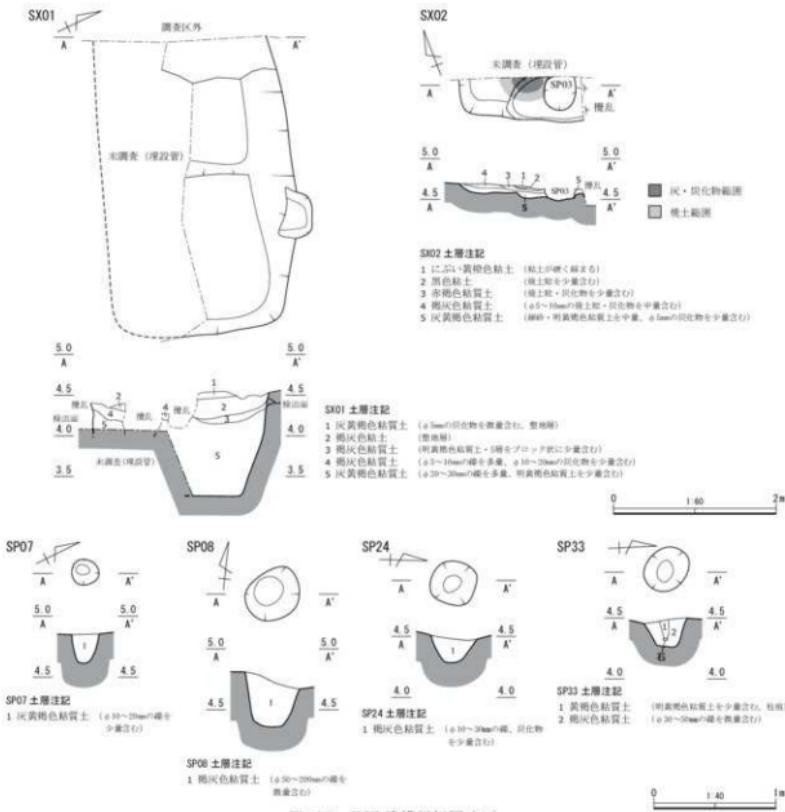


Fig.10 II区 遺構詳細図(2)

断面形は二段形を呈する。重複関係はSP13を切る。規模は長軸0.62m、短軸0.21m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。遺物は出土していない。SK07の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK08 (Fig.9) 調査区南西端に位置する。平面形は不整梢円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.06m、短軸0.71m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-7°-Wである。遺物は出土していない。SK08の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK09 (Fig.9) 調査区南西側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK10を切る。規模は長軸0.91m、短軸0.82m、深さ0.47mを測る。長軸方向はN-47°-Eである。遺物は出土していない。時期は埋土から、近世と考えられる。

SK09出土遺物 (Fig.12) 1点を図示した。35は瀬戸・美濃産陶器の鉄絵皿で、大窯第4段階後半と考えられる。SK09の時期は、出土遺物の特徴から16世紀末～17世紀前葉と考えられる。

SK10 (Fig.9) 調査区南西側に位置する。平面形は方形、断面形は皿形を呈する。重複関係は

SK09に切られる。規模は長軸1.00m、短軸0.90、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-58°-Eである。遺物は出土していない。SK10の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK11 (Fig.9) 調査区南西側に位置する。平面形は方形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP47に切られる。規模は長軸1.00m、短軸0.90、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-58°-Eである。遺物は出土していない。SK11の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

iii) その他の遺構

SX01 (Fig.10) 調査区北西側に位置し、遺構西側は調査区外へ延び、遺構南側は埋設管のため未調査である。平面形は長方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸3.60m、短軸2.16m、深さ1.34mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。遺構北側に階段状の段差が残存していることから、地下室の可能性が指摘される。遺物は近世の陶磁器が少量出土しているが、小破片のため図示していない。SX01の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SX02 (Fig.10) 調査区中央北側に位置し、遺構北側は埋設管のため未調査である。平面形は長方形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP03に切られる。規模は長軸1.50m、短軸0.50m、深さ0.20mを測る。長軸方向はN-69°-Wである。遺構の中央付近に焼土・灰が多量に検出されたことから、炉跡の可能性が考えられる。遺物は出土していない。SX01の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

iv) 小穴

SP07 (Fig.10) 調査区南西側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.22m、短軸0.21m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-29°-Eである。

SP07出土遺物 (Fig.12) 1点を図示した。36はかわらけである。SP07の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SP08 (Fig.10) 調査区南西側に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.45m、短軸0.43m、深さ0.45mを測る。長軸方向はN-84°-Eである。

SP08出土遺物 (Fig.12) 1点を図示した。37は轆の羽口片である。SP08の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SP24 (Fig.10) 調査区中央東側に位置する。平面形は方形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.40m、短軸0.33m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-39°-Wである。

SP24出土遺物 (Fig.12) 1点を図示した。38は上下2つの器を高台部で接合させた京焼風陶器の鉢である。上下の器は釉で融着している。SP24の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後葉と考えられる。

SP33 (Fig.10) 調査区中央東側に位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.40m、短軸0.37m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-18°-Wである。

SP33出土遺物 (Fig.12) 1点を図示した。39は轆の羽口片である。SP33の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

遺構外出土遺物 (Fig.12) 表土、擾乱から出土した8点を図示した。40は瀬戸・美濃産の磁器小皿である。19世紀～近代と考えられる。41は瀬戸産の天目碗で、登窯第5小期、16世紀後半と考えられる。42は美濃産の陶器反り皿で、重ね焼き痕がみとめられる。登窯第4小期、17世紀後半と考えられる。43は瀬戸・美濃産の陶器志野皿で、登窯第1小期、17世紀前葉と考えられる。44は景德镇産の青花皿で、16世紀後半と考えられる。45は美濃産の灯明受皿で、登窯第11小期、19世紀中葉と考えられる。46は土師器の焰烙で、17世紀と考えられる。

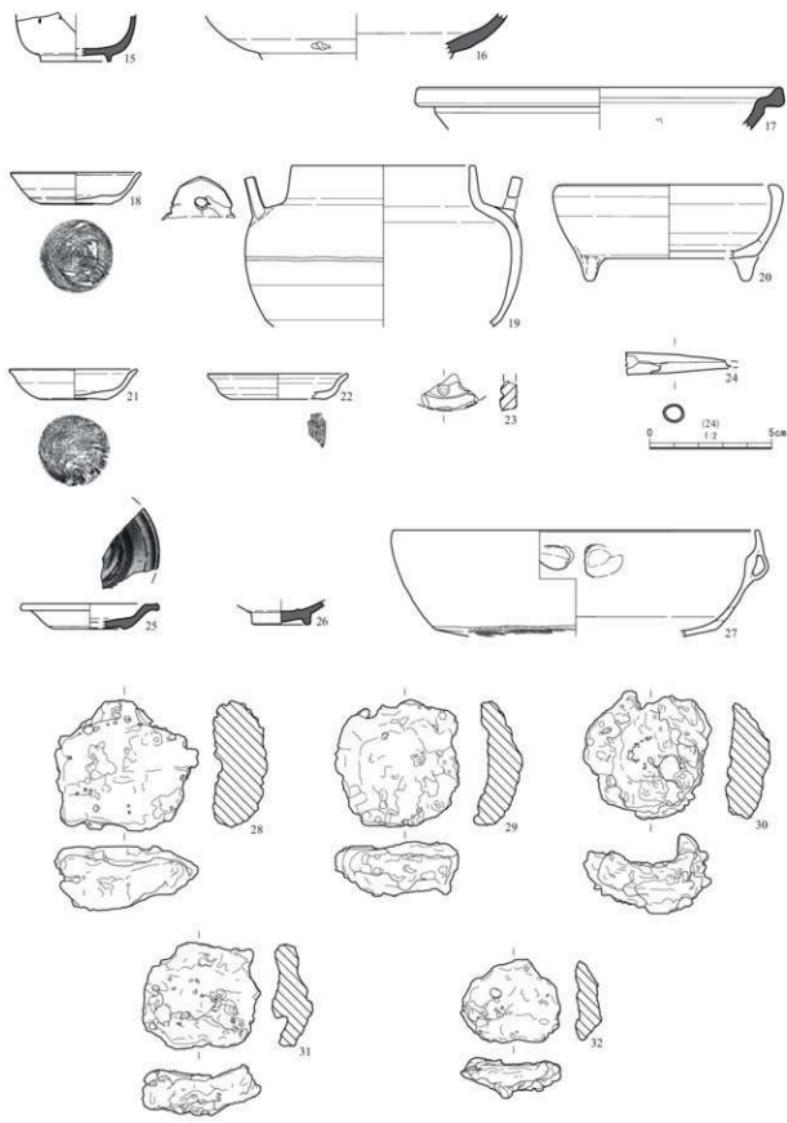


Fig.11 II区出土遺物(1)

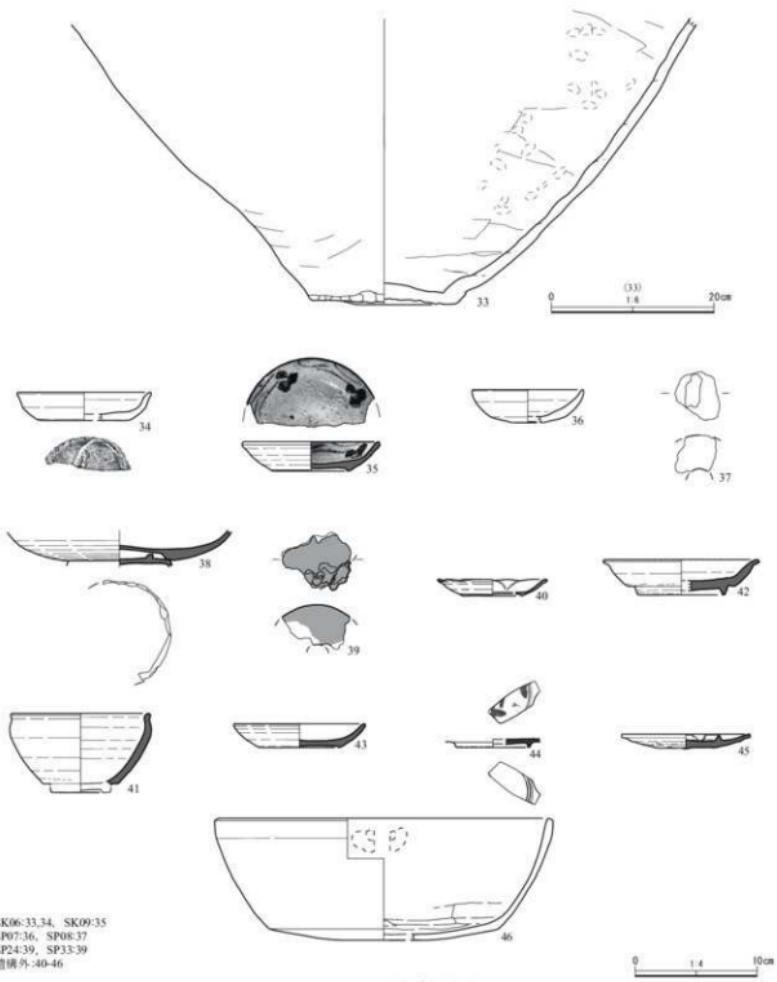


Fig.12 II区出土物 (2)

(3) 小結

II区もI区同様、近代以降の擾乱のため、当時の様子を復元することは困難である。SX01は階段状の施設もみられ、形態から地下室の可能性も考えられるが、南半分は現代の埋設管のため擾乱され、下部の調査も不可能であったため断定するには至らなかった。小穴群は櫛や塀などの一部であった可能性も指摘されようが、今回の調査では明らかにすることことができなかつた。

4 III区の調査

(1) 概要

III区は本遺跡のほぼ中央、南側にあるII区と隣接する。遺構は井戸跡1基、土坑23基、その他の遺構2基、ピット70基を検出した。全体に近代以降の擾乱が多くみられる。

層序については、基盤層より上層の堆積がやや残存しているが、これらは城下町形成にともなう整地層であると推測される。検出した遺構は、本来は整地層を掘り込んだものと、整地層に埋もれたものの、少なくとも2時期に細分される可能性があるが、埋土等で判断することは困難であった。

(2) 鎌倉時代以前の遺構と遺物

SP11 (Fig.15) 調査区南東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.45m、短軸0.30m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-83°-Wである。

SP11出土遺物 (Fig.16) 1点を図示した。47は須恵器有台坏身である。SP11の時期は、出土遺物の特徴から8世紀前半と考えられる。

SP59 (Fig.15) 調査区北側中央に位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.39m、短軸0.32m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN-87°-Eである。

SP59出土遺物 (Fig.16) 1点を図示した。48は須恵器の蓋である。SP59の時期は、出土遺物の特徴から平安時代と考えられる。

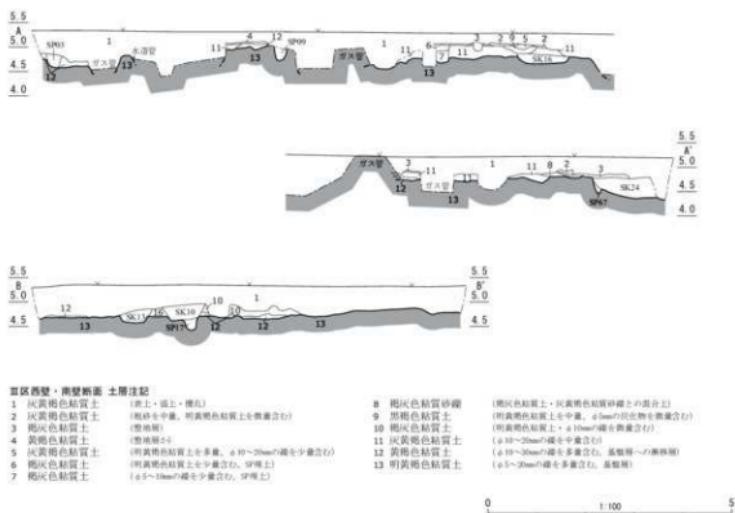


Fig.13 III区 西壁・南壁断面図

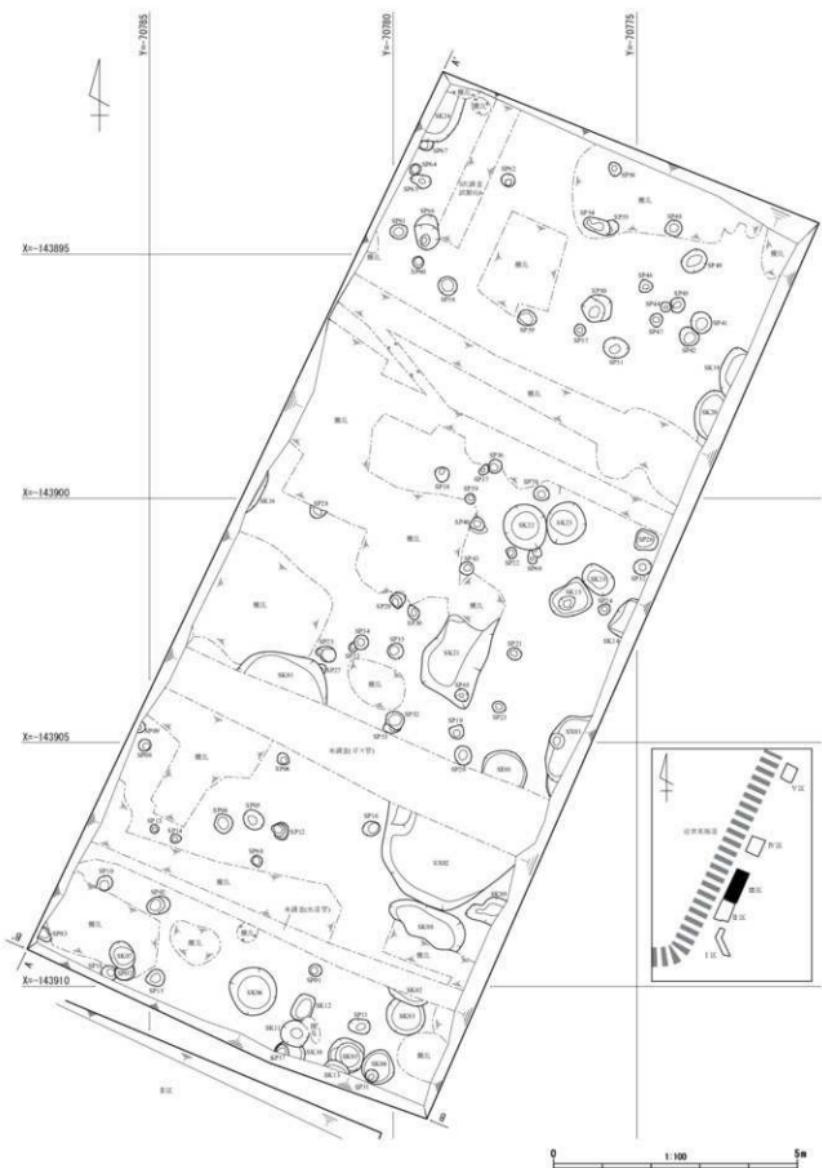


Fig.14 III区 全体図

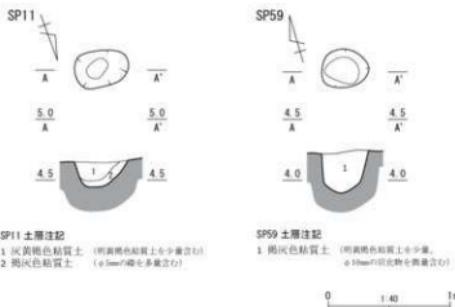


Fig.15 III区 鎌倉時代以前の遺構詳細図



Fig.16 III区 鎌倉時代以前の出土遺物

(3) 城下町にかかわる遺構と遺物

i) 井戸跡

SE01 (Fig.17) 調査区中央東側に位置し、南側は埋設管のため未調査である。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.94m、短軸0.64m、深さ0.66mを測る。長軸方向はN-63°-Wである。素掘りの井戸で、埋設管のため底面までの掘削はできなかった。出土遺物は土師器・陶磁器・瓦片が出土しているが、小破片のため図示はしていない。SE01の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

ii) 土坑

SK01 (Fig.17) 調査区中央西側に位置し、南側は埋設管のため未調査である。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP27を切る。規模は長軸1.97m、短軸0.70m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。

SK01出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、近世陶器が出土しており、うち1点を図示した。49は漬戸・美濃産陶器の擂鉢である。SK01の時期は、出土遺物の特徴から大窯第4段階前半、16世紀後半と考えられる。

SK02 (Fig.17) 調査区南東側に位置し、北側は埋設管のため未調査である。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK03を切る。規模は長軸0.88m、短軸0.18m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-69°-Wである。遺物は出土していない。SK02の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK03 (Fig.17) 調査区南東側に位置する。平面形は円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSK02に切られる。規模は長軸0.82m、短軸0.78m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-37°-Wである。出土遺物は近世陶器が出土しているが、小破片のため図示していない。SK03の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK04 (Fig.17) 調査区南東端に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP31を切る。規模は長軸0.72m、短軸0.68m、深さ0.05mを測る。長軸方向はN-17°-Eである。遺物は出土していない。SK04の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK05 (Fig.17) 調査区南東端に位置する。平面形は円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はSK13に切られる。規模は長軸1.51m、短軸0.66m、深さ0.36mを測る。長軸方向はN-73°-Wである。

SK05 出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・近世陶器の他、多量の礫が出土しており、うち2点を図示した。50・51は瀬戸産陶器で、50は端反碗、51は擂鉢である。SK05の時期は、出土遺物の特徴から登戸第3～4小期、17世紀後半と考えられる。

SK06 (Fig.17) 調査区南側中央に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.98m、短軸0.93m、深さ0.25mを測る。長軸方向はN-24°-Wである。出土遺物は土師器・近世陶器の他、鉄滓1点184.5gが出土しているが、小破片のため図示していない。SK06の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK07 (Fig.17) 調査区南西端に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP07を切る。規模は長軸0.59m、短軸0.48m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-28°-Wである。遺物は出土していない。SK07の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK08 (Fig.17) 調査区南東端に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.68m、短軸0.65m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-64°-Wである。

SK08 出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・近世陶器が出土しており、うち1点を図示した。52はかわらけである。SK08の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK09 (Fig.17) 調査区南東側に位置し、遺構東側は調査区外に延びる。平面形は不整形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.75m、短軸0.56m、深さ0.19mを測る。長軸方向はN-83°-Eである。遺物は出土していない。SK09の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK10 (Fig.17) 調査区南端中央に位置し、遺構南側は調査区外に延びる。平面形は円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK11を切り、SP17に切られる。規模は長軸0.64m、短軸0.31m、深さ0.06mを測る。長軸方向はN-74°-Wである。遺物は出土していない。SK10の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK11 (Fig.17) 調査区南端中央に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK10を切る。規模は長軸0.57m、短軸0.53m、深さ0.26mを測る。長軸方向はN-69°-Wである。出土遺物は土師器・須恵器・陶器が出土しているが、小破片のため図示していない。SK11の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK12 (Fig.17) 調査区南側中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.56m、短軸0.40m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。出土遺物は土師器・陶磁器が出土しているが、小破片のため図示していない。SK12の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK13 (Fig.17) 調査区南東端に位置し、遺構南側は調査区外に延びる。平面形は不明、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK05を切る。規模は長軸0.53m、短軸0.18m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-70°-Wである。出土遺物は土師器・小破片のため図示していない。SK13の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK14 (Fig.17) 調査区中央東端に位置し、遺構東側は調査区外に延びる。平面形は不整形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.85m、短軸0.31m、深さ0.13mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。遺物は出土していない。SK14の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK15 (Fig.18) 調査区中央東側に位置する。平面形は不整楕円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.85m、短軸0.64m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN-56°-Eである。

出土遺物は磁器が出土しているが、小破片のため図示していない。SK15の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SK16 (Fig.18) 調査区中央西端に位置し、遺構西側は調査区外に延びる。平面形は不明、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.99m、短軸0.11m、深さ0.09mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。遺物は出土していない。SK16の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK18 (Fig.18) 調査区中央東側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.71m、短軸0.50m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-48°-Wである。

SK18出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・陶器が出土しており、うち2点を図示した。53は瀬戸・美濃産陶器の筒形香炉で、灰吹転用されている。54は土師器のかわらけである。SK18の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前葉～中葉と考えられる。

SK19 (Fig.18) 調査区北側東端に位置し、遺構東側は調査区外に延びる。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK20を切る。規模は長軸1.01m、短軸0.36m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-27°-Eである。遺物は出土していない。SK19の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK20 (Fig.18) 調査区北側東端に位置し、遺構東側は調査区外に延びる。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK19に切られる。規模は長軸1.03m、短軸0.47m、深さ0.07mを測る。長軸方向はN-16°-Eである。遺物は出土していない。SK20の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK21 (Fig.18) 調査区中央に位置する。平面形は不整形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSP65に切られる。規模は長軸1.99m、短軸0.99m、深さ0.26mを測る。長軸方向はN-28°-Eである。

SK21出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・陶器の他、鉄滓2点135.2gが出土しており、うち2点を図示した。55は瀬戸・美濃産陶器の天目碗である。56は土師器のかわらけである。SK21の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前半と考えられる。

SK22 (Fig.18) 調査区中央北寄りに位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP69を切る。規模は長軸0.97m、短軸0.88m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-21°-Wである。

SK22出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・陶器が出土しており、うち3点を図示した。57は美濃産陶器の天目碗である。58は志戸呂産陶器の片口で、17世紀頃と考えられる。59は土師器のかわらけである。SK22の時期は、出土遺物の特徴から17世紀中葉と考えられる。

SK23 (Fig.18) 調査区中央北寄りに位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.91m、短軸0.81m、深さ0.28mを測る。長軸方向はN-31°-Eである。

SK23出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器・陶磁器・瓦が出土しており、うち2点を図示した。60は瀬戸・美濃産陶器の志野皿で、大窯第4段階後半、16世紀末～17世紀前葉と考えられる。61は用途不明の石製品で、表面2面に文字が彫られている。「成子」の文字が2箇所確認できる。SK23の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前葉と考えられる。

SK24 (Fig.18) 調査区北西端に位置し、遺構の北西側は調査区外へ延びる。平面形は方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP67を切る。規模は長軸1.14m、短軸0.51m、深さ0.23mを測る。長軸方向はN-27°-Eである。遺物は出土していない。SK24の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

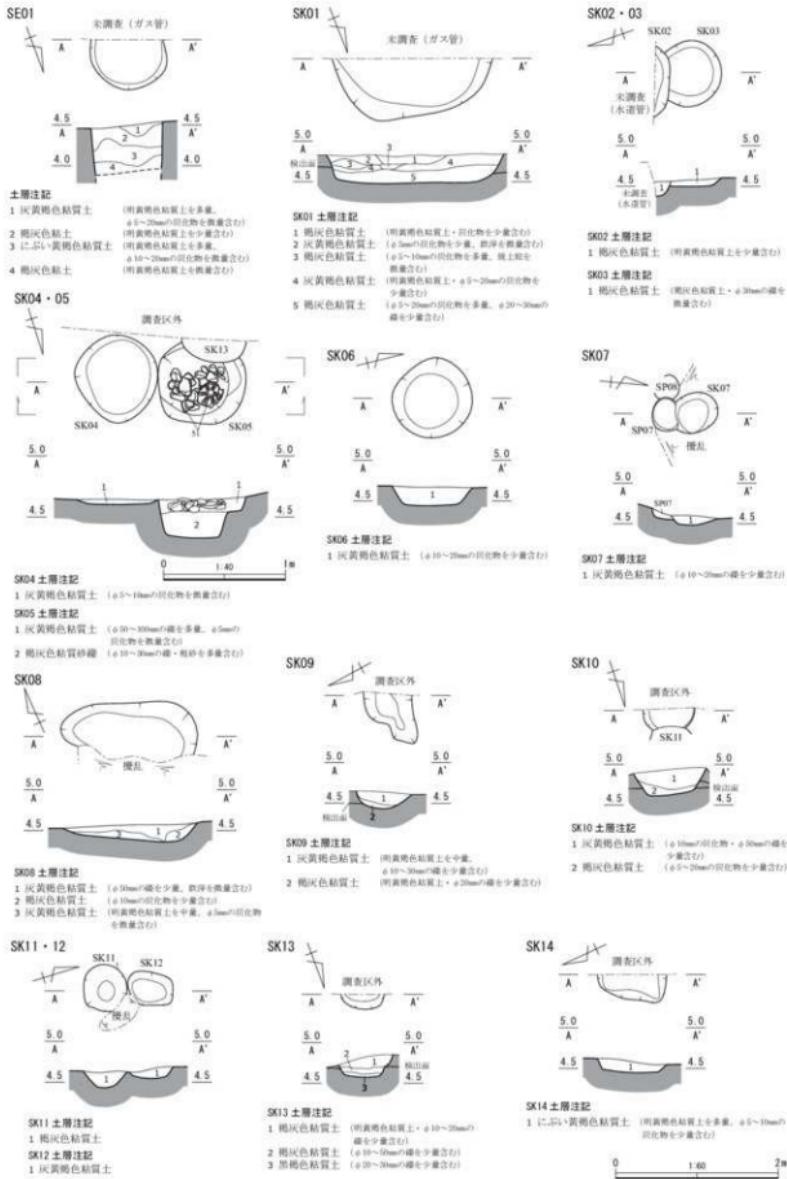


Fig.17 III 区域 下町にかかわる構造詳細図 (1)

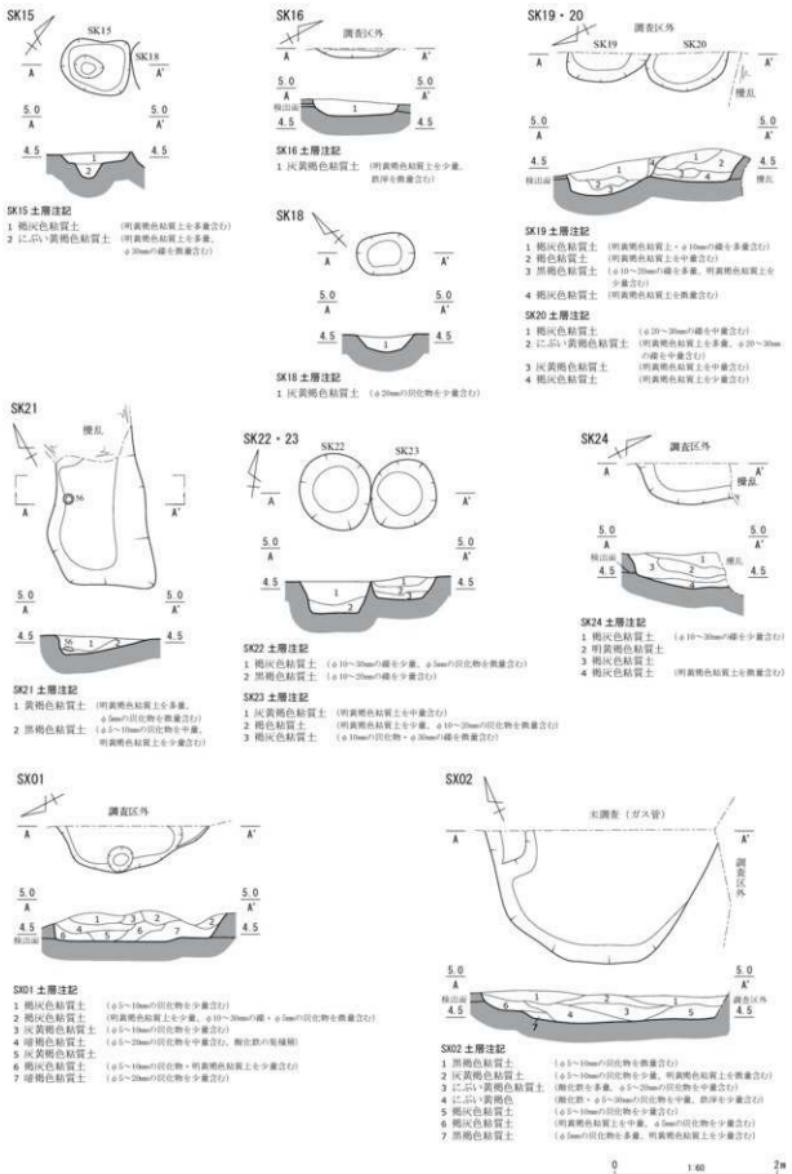


Fig.18 III区 城下町にかかる構造詳細図(2)

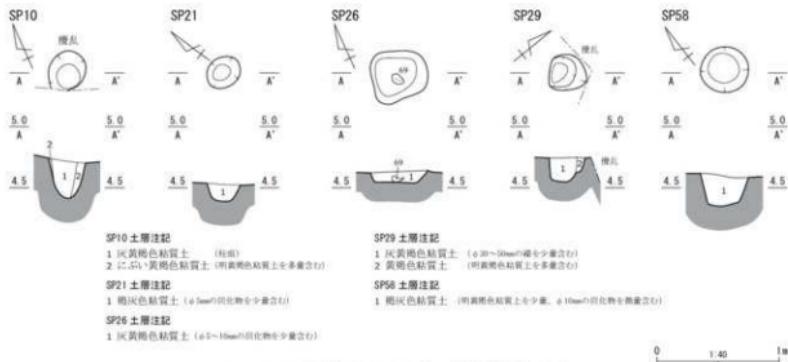


Fig.19 III区 城下町にかかる遺構詳細図(3)

iii) その他の遺構

SX01 (Fig.18) 調査区中央東端に位置し、遺構東側は調査区外へ延びる。平面形は不整形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.88m、短軸0.54m、深さ0.15mを測る。長軸方向はN-27°-Eである。

SX01出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、陶磁器が出土しており、うち1点を図示した。62は土師器のかわらけである。SX01の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SX02 (Fig.18) 調査区南東側に位置し、北側は埋設管のため未調査である。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸2.84m、短軸0.64m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-66°-Wである。

SX02出土遺物 (Fig.20) 出土遺物は、土師器の他、鉄滓9点1325.0gが出土しており、うち4点を図示した。63・64は土師器のかわらけである。65・66は碗形滓である。SX02の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

iv) 小穴

SP10 (Fig.19) 調査区西南側に位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.33m、短軸0.30m、深さ0.32mを測る。長軸方向はN-40°-Eである。

SP10出土遺物 (Fig.21) 1点を図示した。67はかわらけである。SP10の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SP21 (Fig.19) 調査区中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.30m、短軸0.25m、深さ0.16mを測る。長軸方向はN-83°-Wである。

SP21出土遺物 (Fig.21) 1点を図示した。68はかわらけである。SP21の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

SP26 (Fig.19) 調査区中央東側に位置する。平面形は不整楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.46m、短軸0.39m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。

SP26出土遺物 (Fig.21) 69はかわらけで、スヌの付着状況から灯明皿とみられる。SP26の時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

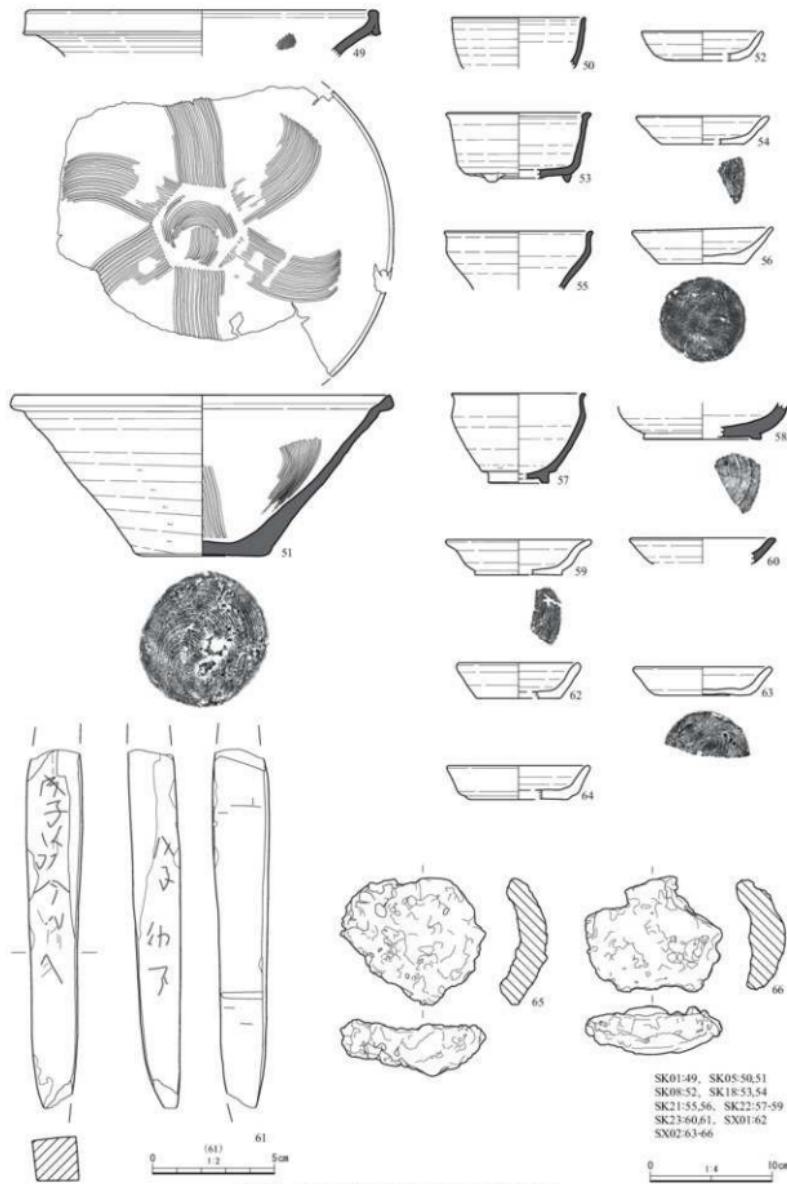


Fig.20 III区 城下町にかかわる出土遺物（1）

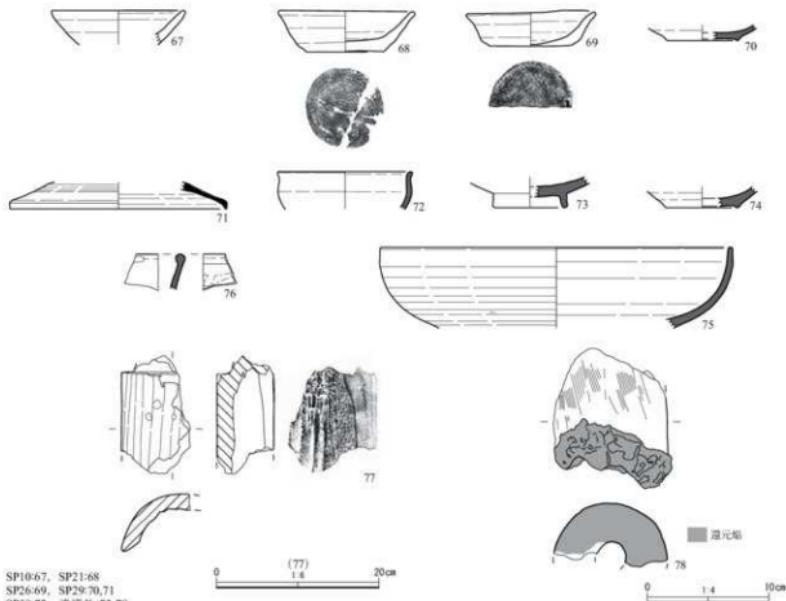


Fig.21 III区 城下町にかかる出土遺物(2)

SP29 (Fig.19) 調査区中央に位置する。平面形は円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.31m、短軸0.29m、深さ0.21mを測る。長軸方向はN-44°-Eである。

SP29出土遺物 (Fig.21) 2点を図示した。70は瀬戸・美濃産陶器の丸皿で、大窯第2～3段階、16世紀中～後半と考えられる。71は須恵器の坏蓋である。SP29の時期は、出土遺物の特徴から16世紀中～後半と考えられる。

SP58 (Fig.19) 調査区北西側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。

SP58出土遺物 (Fig.21) 1点を図示した。72は瀬戸・美濃産陶器の天目碗である。SP58の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後半と考えられる。

遺構外出土遺物 (Fig.21) 表土からと、3次調査の出土遺物6点を図示した。73は陶器中皿、74が志野皿で、ともに登窯第1～2小期、17世紀前葉と考えられる。75は志戸呂産陶器の大皿で、大窯第4段階、16世紀末～17世紀初頭と考えられる。76は肥前産陶器の香炉である。77は近世の丸瓦、78は輪羽口である。

(4) 小結

III区では鉄滓が多く出土する土坑が複数検出されている。共伴遺物がなく、明確な時期を示すことが出来ないものの、鍛冶関連施設があった可能性が指摘できる。また、SK23出土の石製品は用途こそ明確にはできないが、「成子」と読める文字が刻まれる。

5 IV区の調査

(1) 概要

VI区は本遺跡の北側、III区と隣接する。遺構は土坑2基、ピット9基を検出した。調査区の大半が近代以降の擾乱によって削平されており、遺構の残存状況は極めて部分的であった。

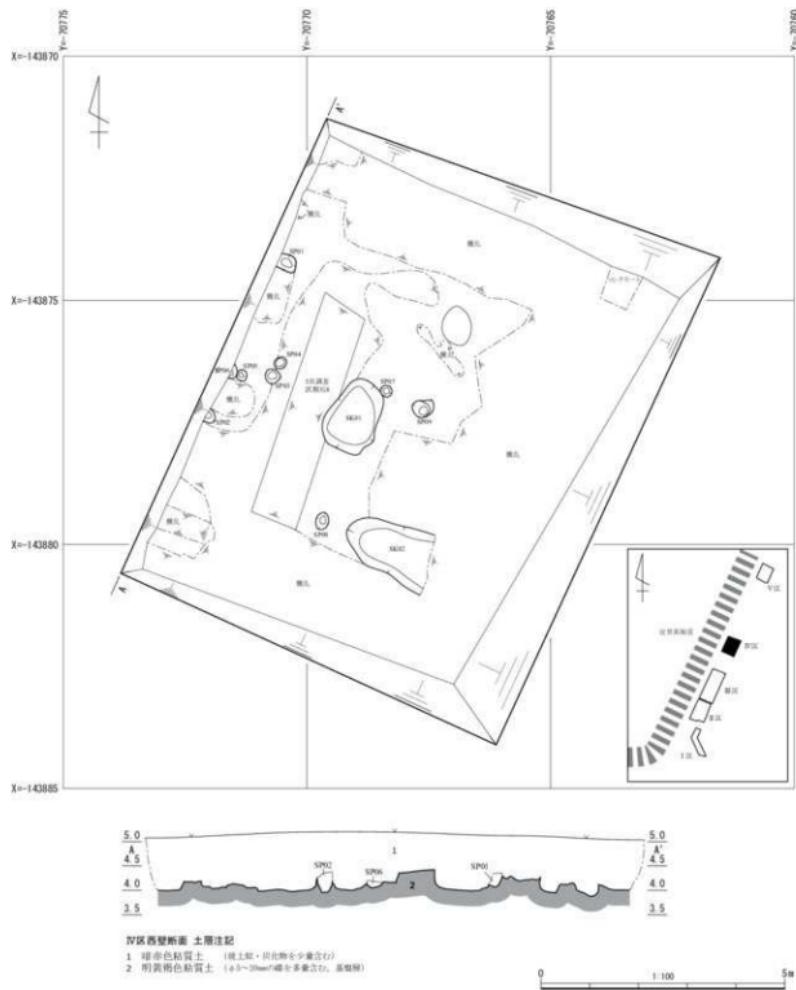


Fig.22 IV区 全体図・西壁断面図

(2) 城下町にかかる遺構と遺物

i) 土坑

SK01 (Fig.23) 調査区中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP07に切られる。規模は長軸1.51m、短軸0.91m、深さ0.27mを測る。長軸方向はN-27°-Eである。

SK01出土遺物 (Fig.24) 出土遺物は、土師器、陶器が出土しており、うち6点を図示した。79は産地不明の陶器碗である。80・81は土師器熔炉で、17世紀前半と考えられる。82は丸瓦である。83は刀子である。84は北宋錢で、熙寧元宝(初鑄1068年)である。SK01の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前半と考えられる。

SK02 (Fig.23) 調査区中央南側に位置する。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.81m、短軸1.24m、深さ0.42mを測る。長軸方向はN-66°-Eである。

SK02出土遺物 (Fig.24) 出土遺物は、土師器、陶器が出土しており、うち2点を図示した。85は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で登窯第2小期、17世紀前半と考えられる。86は志戸呂産陶器の捕鉢で、17世紀前半と考えられる。SK02の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前半と考えられる。

ii) 小穴

SP01 (Fig.23) 調査区西端に位置し、遺構西側は調査区外へ延びる。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.37m、短軸0.33m、深さ0.29mを測る。長軸方向はN-69°-Wである。

SP01出土遺物 (Fig.24) 1点を図示した。87はかわらけである。SP01時期は、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

遺構外出土遺物 (Fig.24) 表土からの出土遺物4点を図示した。88は瀬戸・美濃産陶器の内禿皿で、大窯第3段階後半、16世紀後半と考えられる。89は美濃産陶器の菊花皿で、17世紀後半と考えられる。90はかわらけである。91は寛永通宝(古寛永)である。

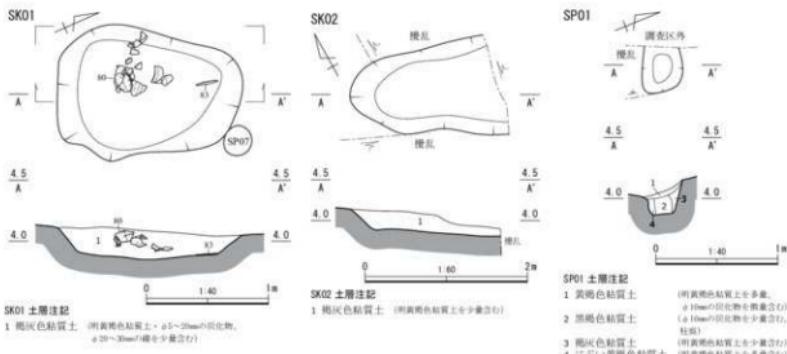


Fig.23 IV区 遺構詳細図

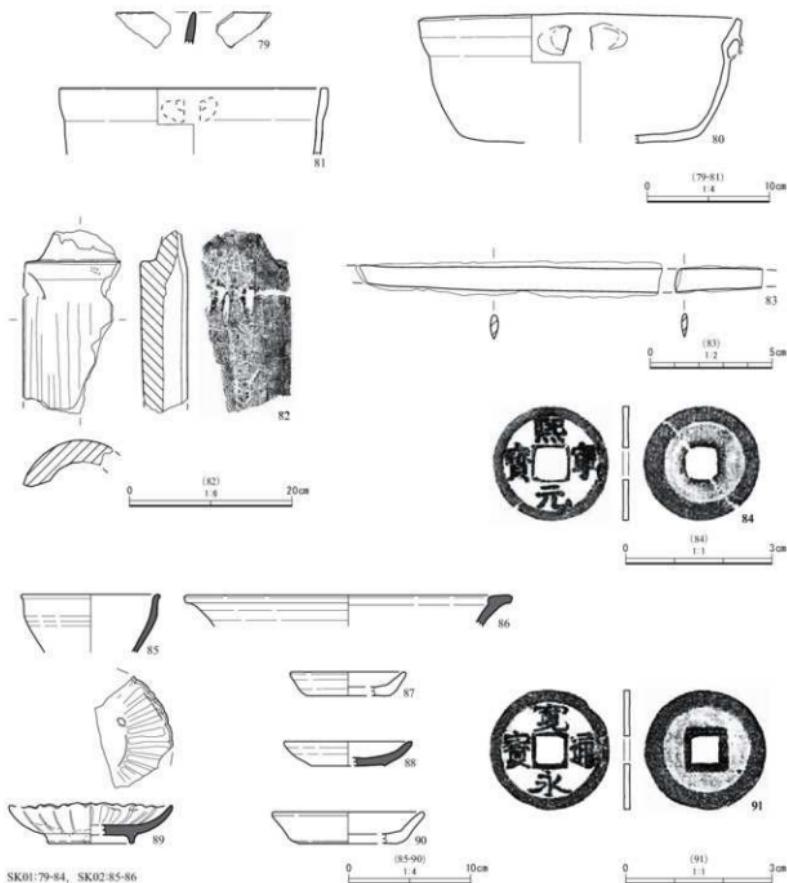


Fig.24 IV区出土遺物

(3) 小結

調査区の大半を近代以降の擾乱により削平されており、ごく一部が残存するのみであった。少なからず確認できた遺構・遺物の様相を見る限りにおいては、隣接する他調査区と、ほぼ同様の土地利用がなされていたと推測される。

6 V区の調査

(1) 概 要

V区は本遺跡の最北端に位置する。遺構は溝状遺構2条、土坑8基、ピット26基を検出した。調査区北東側と南側に近代以降と考えられる擾乱がみられる。本調査区は残存する基盤層の標高が他の調査区よりも0.8m程度低くなっているため、もとは産地もしくは谷地形であったことが推測される。また、近世城下町建設にあたって、大規模な造成が行われたと考えられ、本調査区北壁および東壁でみられる堆積は、その際の造成土や整地層であると考えられる。検出された遺構・遺物も、他の調査区に比べ、やや古い時代のものが認められる。

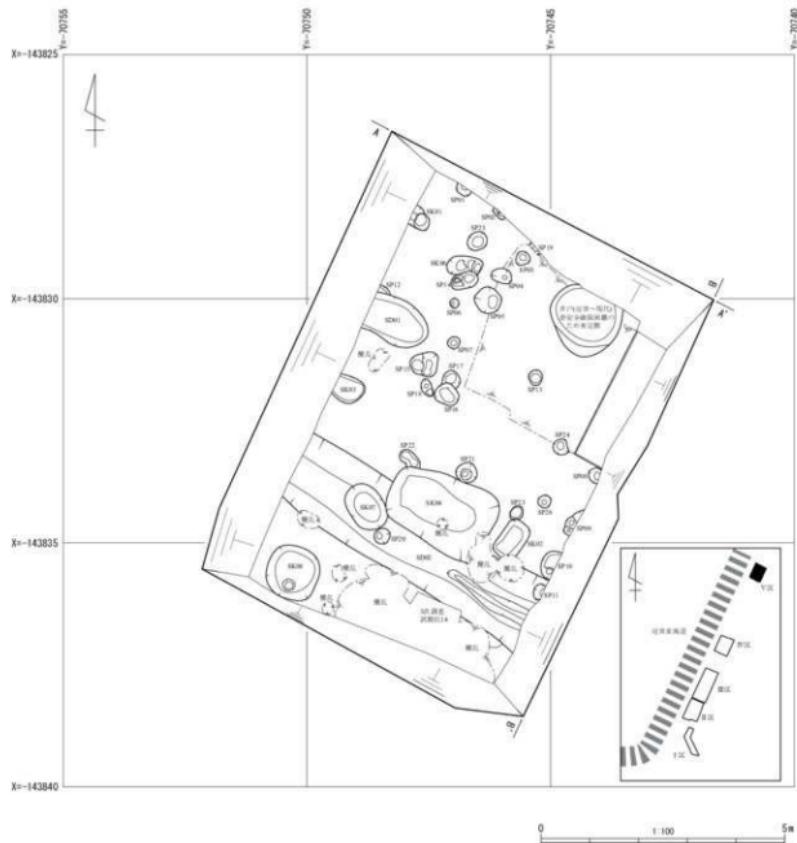


Fig.25 V区全体図

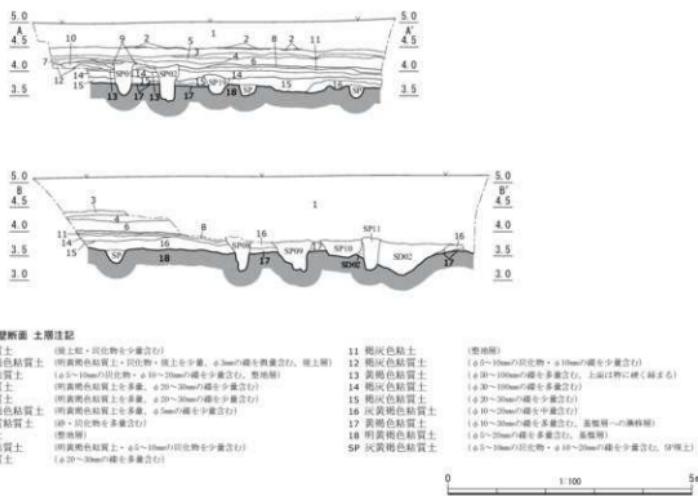


Fig.26 V区 北壁・東壁断面図

(2) 鎌倉時代以前の遺構と遺物

SP06 (Fig.27) 調査区北西側に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.21m、短軸0.19m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-3°-Wである。

SP06出土遺物 (Fig.28) 4点の銭貨が重なった状態で出土したが、遺存状態が悪く肉眼・拓本での判別が不可能であったため、X線写真撮影を用いて2点を特定した。92は祥符元宝(初鑄1008年)、93は皇宋通宝(初鑄1039年)である。SP06の時期は、銭貨のみの出土のため特定は難しいが、鎌倉時代以前と考えられる。

SP12 (Fig.27) 調査区西端に位置し、遺構西側は調査区外に延びる。平面形は楕円形と推定され、断面形は二段形を呈する。重複関係はSD01に切られる。規模は長軸0.43m、短軸0.26m、深さ0.35mを測る。長軸方向はN-9°-Eである。

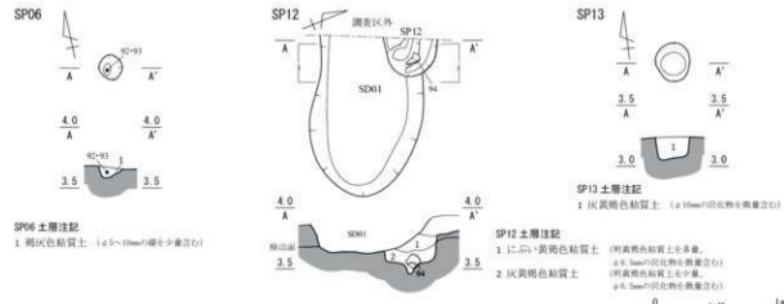


Fig.27 V区 鎌倉時代以前の遺構詳細図

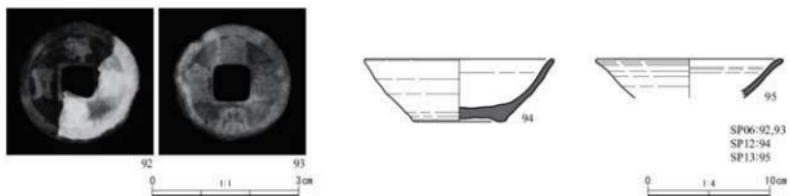


Fig.28 V区 鎌倉時代以前出土遺物

SP12出土遺物 (Fig.28) 出土遺物1点を図示した。94は山茶碗である。SP12の時期は、出土遺物の特徴から13世紀中葉と考えられる。

SP13 (Fig.27) 調査区中央に位置する。平面形は円形、断面形は箱形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.18mを測る。長軸方向はN-5°-Eである。

SP13出土遺物 (Fig.28) 出土遺物1点を図示した。95は山茶碗である。SP13の時期は、出土遺物の特徴から13世紀中葉と考えられる。

(3) 城下町にかかわる遺構と遺物

i) 溝状遺構

SD01 (Fig.29) 調査区西端に位置し、遺構西側は調査区外へ延びる。平面形は東西に延び、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSP12を切る。規模は長軸1.30m、短軸0.99m、深さ0.33mを測る。長軸方向はN-68°-Wである。遺物は出土していない。SD01の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SD02 (Fig.29) 調査区中央南寄りに位置し、遺構両端は調査区外へ延びる。平面形は東西に延び、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSK04・07、SP11・20に切られる。規模は長軸5.58m、短軸2.01m、深さ0.72mを測る。長軸方向はN-58°-Wである。SD02の時期は出土遺物の特徴から、近世と考えられる。

SD02出土遺物 (Fig.30) 出土遺物は、土師器、陶磁器が出土しており、うち25点を図示した。96は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で、大窯第4段階、17世紀前葉と考えられる。97は瀬戸・美濃産陶器の丸碗で、登窯第5～6小期、16世紀末～17世紀前葉と考えられる。98は志戸呂産陶器の小皿で、17世紀代と考えられる。99は志戸呂産陶器の小皿で、大窯第4段階、17世紀前葉と考えられる。100は瀬戸・美濃産陶器の折線皿で、大窯第4段階前半、16世紀末と考えられる。101は瀬戸・美濃産陶器の黄瀬戸鉢で、登窯第1小期、17世紀前葉と考えられる。102は志戸呂産陶器の播鉢で、大窯第4段階、17世紀前葉と考えられる。103は常滑産陶器の壺である。104は志戸呂産陶器の瓶類である。105・106は土師器の灯明皿である。107～113はかわらけである。114～116は土師器培烙で、いずれも17世紀前半と考えられる。117・118は土師器風炉である。119は丸瓦である。以上の出土遺物には、時期幅があるものの、SD02の埋没時期は17世紀前葉と考えられる。17世紀前葉を中心とした時期の溝といえ、18世紀前葉まで、残存していた可能性がある。

ii) 土坑

SK01 (Fig.29) 調査区北西端に位置し、遺構西側は調査区外へ延びる。平面形は不明で、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.40m、短軸0.42m、深さ0.37mを測る。長軸方向はN-66°-Wである。SK01の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK02 (Fig.29) 調査区中央東寄りに位置する。平面形は長方形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.83m、短軸0.52m、深さ0.21mを測る。長軸方向はN-37°-Eである。

SK02出土遺物 (Fig.31) 出土遺物は土師器・陶器が出土しており、うち1点を図示した。120は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で、登窯第3～4小期、17世紀後半と考えられる。SK02の時期は、出土遺物の特徴から17世紀後半を中心とした時期と考えられる。

SK03 (Fig.29) 調査区中央西端に位置し、遺構西側は調査区外に延びる。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.60m、短軸0.45m、深さ0.10mを測る。長軸方向はN-66°-Wである。遺物は出土していない。SK03の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK04 (Fig.29) 調査区中央南寄りに位置する。平面形は長方形で、断面形は逆台形を呈する。重複関係はSD02、SK07、SP22を切る。規模は長軸1.55m、短軸0.54m、深さ0.54mを測る。長軸方向はN-63°-Wである。

SK04出土遺物 (Fig.31) 出土遺物は土師器・陶磁器が出土しており、うち8点を図示した。121は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で、17世紀中葉と考えられる。122は瀬戸・美濃産陶器の丸碗で、17世紀前葉と考えられる。123は志戸呂産陶器の小皿で、大窯第4段階、16世紀末～17世紀前葉と考えられる。124・125は常滑産陶器の甕である。126・127はかわらけである。128は土師器焰烙である。SK04の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前～中葉と考えられる。

SK06 (Fig.29) 調査区北西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は三段形を呈する。重複関係はSP14に切られる。規模は長軸0.71m、短軸0.35m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN-82°-Wである。遺物は出土していない。SK06の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK07 (Fig.29) 調査区中央南寄りに位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はSK04に切られ、SD02を切る。規模は長軸1.01m、短軸0.72m、深さ0.14mを測る。長軸方向はN-35°-Wである。土師器・陶器が出土しているが、小破片のため図示していない。SK07の時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SK08 (Fig.29) 調査区南西端に位置する。平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸1.09m、短軸1.07m、深さ0.24mを測る。長軸方向はN-24°-Eである。

SK08出土遺物 (Fig.31) 出土遺物は土師器・陶器の他、鉄滓1点55.8gが出土しており、うち3点を図示した。129は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で、大窯第4段階前半、16世紀末と考えられる。130は志戸呂産陶器の擂鉢で、大窯第4段階、16世紀末～17世紀前葉と考えられる。131は土師器片である。SK08の時期は、出土遺物の特徴から18世紀前半～中葉と考えられる。

iii) 小穴

SP21 (Fig.29) 調査区中央南側に位置する。平面形は円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.44m、短軸0.42m、深さ0.38mを測る。長軸方向はN-84°-Wである。

SP21出土遺物 (Fig.31) 出土遺物1点を図示した。132は瀬戸・美濃産陶器の志野織部皿で、登窯第1小期、17世紀前葉と考えられる。SP21の時期は、出土遺物の特徴から17世紀前葉と考えられる。

遺構外出土遺物 (Fig.31) 摂乱からの出土遺物13点、基本層からの出土遺物10点、合計23点を図示した。133は初山産陶器の天目碗で、大窯第3段階後半、16世紀末と考えられる。134は瀬戸・美濃産陶器の天目碗で、大窯第4段階後半、16世紀末～17世紀前葉と考えられる。135は瀬戸産陶器の天目碗で、登窯第4小期、17世紀後葉と考えられる。136は志戸呂産陶器の端反碗である。

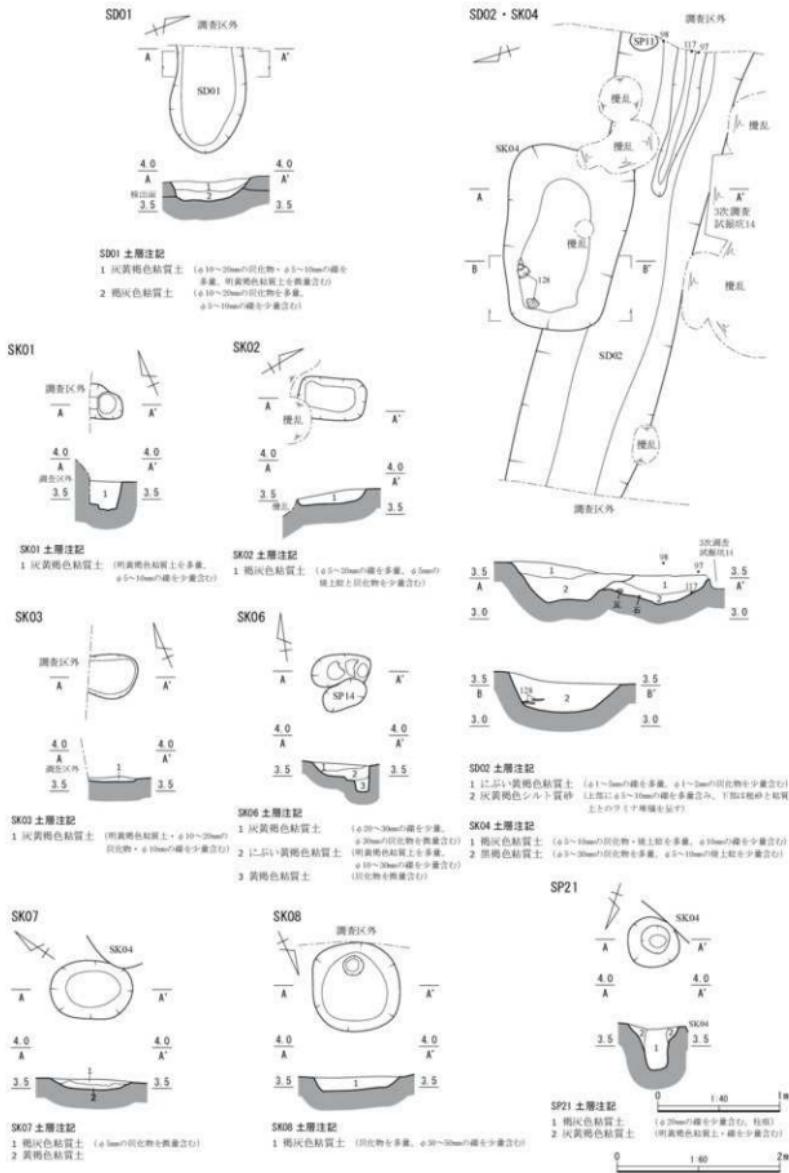


Fig.29 V区 城下町にかかる構造詳細図

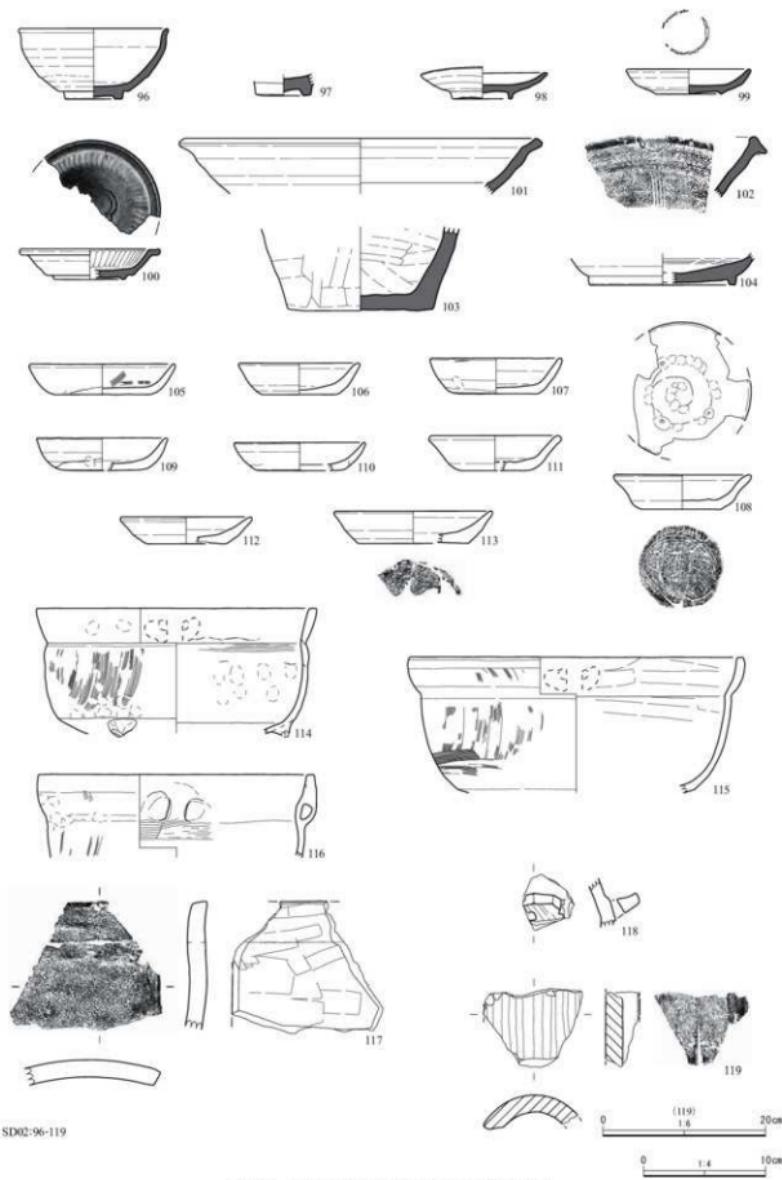


Fig.30 V区 城下町にかかわる出土遺物（1）

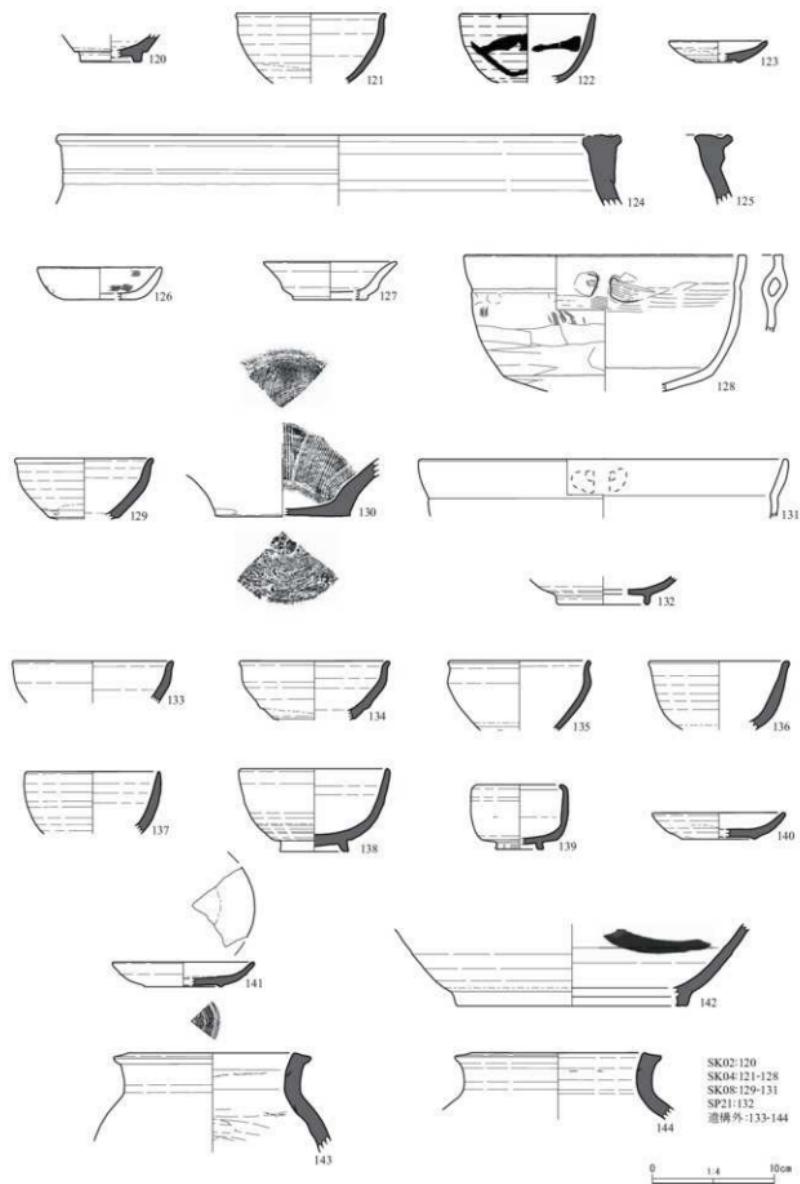
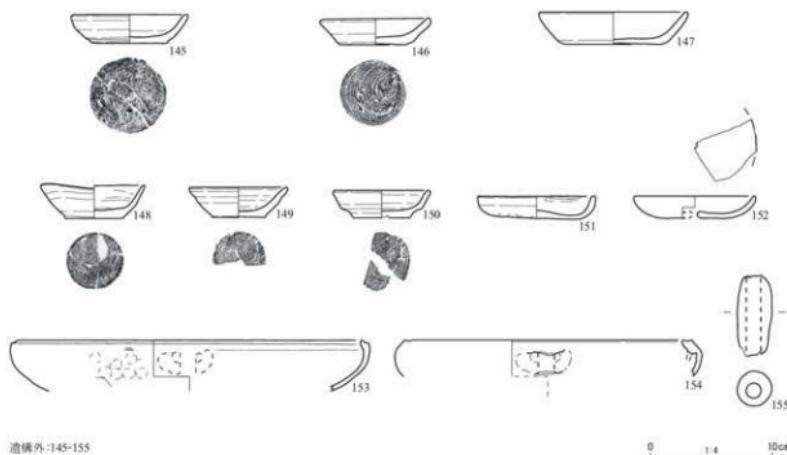


Fig.31 V区 城下町にかかわる出土遺物（2）



遺構外:145-155

Fig.32 V区 城下町にかかる出土遺物 (3)

137は初山産陶器の丸碗である。138は美濃産陶器の尾呂茶碗で、登窯第6～7小期、17世紀前葉～中葉と考えられる。139は志戸呂産陶器の半筒碗である。140は初山産陶器の小皿で、大窯第3段階後半、16世紀末と考えられる。141は調査区壁面3層からの出土した初山産陶器の皿で、大窯第3段階後半、16世紀末と考えられる。142は美濃産陶器の鉄絵鉢で、登窯第3～4小期、17世紀後半と考えられる。143・144は常滑産陶器の壺である。145～152はかわらけである。153・154は土師器培塿である。155は土鍤である。

(4) 小 結

V区は、前述したように、本来の地形は窪地または谷地形であった可能性が指摘できる。基盤層の標高が他調査区よりもやや低く、そのために後世の擾乱をまぬがれ、最も遺存状態が良好であった。水平に薄く堆積する連続した層は、版築は認められないものの、整地層であると判断でき、さらに検出した遺構の掘り込み層を観察した結果、A～Cの3段階にわたる整地面を捉えることができた。これらは断続的に城下町の整備が図られていたことを示すと考えられる。しかしながら、城下町形成時と推測される整地面B・Cから出土した遺物はかわらけが多く、明確な時期差を提示するまでは至らなかった。

また、大窯第3段階後半～第4段階の遺物を多く含む遺構が複数確認できたことで、城下町の形成時期が16世紀後葉に遡る可能性が高まったと考えられる。特に遺物出土量の多いSD02は、主なる遺物から17世紀前葉の埋没時期を想定したが、古いものは16世紀後葉、新しいものは18世紀前葉の遺物も少量出土している。これは、溝が徐々に埋没していく過程で混入した遺物の可能性もあり、城下町形成時に開削され、最終的な埋没時期まで、長期間に渡って溝として機能していたことが推測される。その他、SP13から13世紀中葉の山茶碗が出土したことによって、鎌倉時代の遺跡が存在した可能性が高い。城下町形成時に大部分は破壊されたと推測されるが、このような貴重な情報が得られたことも、重要な成果であろう。

Tab.1 土出土遺物観察表

Fig.	番号	地区	遺構	種別	産地	細別	反転 復元	口径・幅 (cm)	高さ・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	色調	備考
7	1	I 区	SE01	磁器	肥前	端反碗	反	(11.2)	5.9	(4.4)	白	燒継底・能郡印あり
7	2	I 区	SE01	磁器	瀬戸・美濃	広東碗		10.6			白	登窯第10小期
7	3	I 区	SE01	磁器	肥前	小皿		13.6	4.5	7.6	淡白	
7	4	I 区	SE01	陶器	瀬戸・美濃	お神酒徳利		1.7	10.8	4.0	黒灰	登窯第9小期
7	5	I 区	SE01	土師器		火鉢	反	(18.2)			橙	煤付着、足込み五弁花印あり(コンニヤク判)
7	6	I 区	SE01	石製品		砥石		6.8	22.1	4.6	灰	
7	7	I 区	SE02	磁器	肥前	中碗		9.5	4.8	3.8	白	くらわんか手
7	8	I 区	SE02	磁器	肥前	半筒碗	反	(7.0)	6.2	(3.4)	白	見込み五弁花印あり(手書き)
7	9	I 区	SE02	陶器	美濃	徳利	反	(2.8)			暗茶褐	焼成不良(生焼け)
7	10	I 区	3次調査 試掘坑1	陶器	瀬戸	輪乳皿		13.2	2.7	6.4	淡黄	登窯第5小期
7	11	I 区	SP05	陶器	肥前	碗	反			(5.8)	浅黄	京焼風陶器、刻印は「清水」の「水」部分
7	12	I 区	3次調査 試掘坑1	陶器	美濃	丸碗	反	(11.8)			灰白	登窯第5~6小期
7	13	I 区	3次調査 試掘坑2	陶器	瀬戸・美濃	鉄込皿	反	(11.2)	2.7	5.6	浅黄	登窯第1小期
7	14	I 区	3次調査 試掘坑1	陶器	瀬戸・美濃	大皿	反	(24.4)			淡黄	登窯第1~2小期
11	15	II 区	SD01	陶器	肥前	碗				(5.8)	灰黄	京焼風陶器、真須絵
11	16	II 区	SD01	陶器	瀬戸・美濃	黄瀬戸大皿	反				灰白	重ね焼き痕、登窯第1~4小期
11	17	II 区	SD01	陶器	瀬戸・美濃	搖鉢	反	(29.4)			明赤褐	外外面泥漿掛け、登窯第5小期
11	18	II 区	SD01	土師器		灯明皿		10.4	2.6	6.0	にぶい橙	
11	19	II 区	SD01	土師器		燈塔	反	(15.0)			にぶい橙	煤付着。取手孔径1.0
11	20	II 区	SD01	土師器		火鉢	反	(17.0)	7.9	(14.4)	橙	煤付着
11	21	II 区	SD01	土師器		かわらけ	反	(10.3)	2.5	(5.2)	にぶい黄橙	
11	22	II 区	SD01	土師器		かわらけ	反	(11.2)	2.1	(7.8)	灰白	
11	23	II 区	SD01		瓦	丸瓦					灰	
11	24	II 区	SD01	金属製品		煙管吸口		1.0		(4.3)	黒褐	
11	25	II 区	SK01	陶器	瀬戸・美濃	折筋皿	反	(11.0)	2.1	(6.0)	灰白	袖: 淡黄色、大窯第4段階前半
11	26	II 区	SK05	陶器	美濃	丸碗				4.8	灰白	袖: 黒褐色、奉骨茶碗、登窯第6~7小期
11	27	II 区	SK05	土師器		燈塔	反	(30.0)			浅黄橙	煤付着
11	28	II 区	SK05	鐵津		碗形萍		11.4	10.4	3.2	赤褐	
11	29	II 区	SK05	鐵津		碗形萍		10.2	10.0	2.8	赤褐	
11	30	II 区	SK05	鐵津		碗形萍		9.9	9.4	3.2	赤褐	
11	31	II 区	SK05	鐵津		碗形萍		9.6	8.4	3.2	赤褐	
11	32	II 区	SK05	鐵津		碗形萍		8.0	6.5	2.0	赤褐	
12	33	II 区	SK06	陶器	常滑	甕				9.0	橙	
12	34	II 区	SK06	土師器		かわらけ	反	(10.8)	2.3	(7.6)	にぶい橙	
12	35	II 区	SK09	陶器	瀬戸・美濃	鉄込皿	反	(11.0)	2.4	(6.0)	灰白	大窯第4段階後半
12	36	II 区	SP07	土師器		かわらけ	反	(9.0)	2.7	(2.6)	淡黄橙	
12	37	II 区	SP08	土製品		羽口					淡黄	
12	38	II 区	SP24	陶器	肥前	鉢	反				灰白	袖: オリーブ色、京焼風陶器、上下的器は袖素で融着させている
12	39	II 区	SP33	土製品		羽口					橙	
12	40	II 区	表土	磁器	瀬戸・美濃	小皿	反	(8.8)	1.4	(4.8)	白	
12	41	II 区	表土	陶器	瀬戸	天目碗	反	(11.2)			淡黄	袖: 黒褐色、登窯第5小期
12	42	II 区	擾乱	陶器	美濃	反り皿	反	(12.5)	2.9	(7.2)	淡黄	重ね焼き痕、登窯第4小期
12	43	II 区	擾乱	陶器	瀬戸・美濃	志野皿	反	(10.6)	1.9	(6.6)	灰白	登窯第1小期
12	44	II 区	擾乱	磁器	景徳鎮	青花皿	反				白	
12	45	II 区	表土	陶器	美濃	灯明吸皿		10.5	1.2	4.6	暗オリーブ葉	登窯第11小期
12	46	II 区	擾乱	土師器		燈塔	反	(27.0)	10.0	(18.8)	にぶい黄橙	
16	47	III 区	SP11	須恵器		有台环身	反	(14.1)	4.5	(9.2)	灰	
16	48	III 区	SP59	須恵器		摘蓋	反			(15.8)	灰	
20	49	III 区	SK01	陶器	瀬戸・美濃	搖鉢	反	(28.2)			明赤褐	外外面泥漿掛け、大窯第4段階前半
20	50	III 区	SK05	陶器	瀬戸	端反碗	反	(10.8)			淡黄	袖: 黒褐色、登窯第3~4小期

Fig.	番号	地区	構造	種別	産地	細別	反転 復元	口径・幅 (cm)	器高・ (cm)	長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	色調	備考
20	51	III区	SK05	陶器	漸戸	搖鉢	反	(30.8)	13.2	(9.4)	明赤褐色	内外面泥漿掛け、登窯第3小期	
20	52	III区	SK08	土師器		かわらけ	反	(9.8)	2.4	(6.2)	灰白		
20	53	III区	SK18	陶器	漸戸・美濃	筒形香炉	反	(11.5)	5.7	(8.8)	淡黄褐色	灰吹瓶用。登窯第5～7小期	
20	54	III区	SK18	土師器		かわらけ	反	(10.6)	2.3	(6.8)	にぶい橙		
20	55	III区	SK21	陶器	漸戸・美濃	天目碗	反	(12.0)	7.4		淡黄	釉：暗褐色、登窯第6小期	
20	56	III区	SK21	土師器		かわらけ	11.4		6.8		灰白		
20	57	III区	SK22	陶器	美濃	天目碗	反	(10.8)		(4.8)	灰白	釉：茶褐色、登窯第3小期	
20	58	III区	SK22	陶器	志戸呂	片口	反			(9.6)	にぶい褐色		
20	59	III区	SK22	土師器		かわらけ	反	(11.6)	2.9	(7.0)	淡黄褐色		
20	60	III区	SK23	陶器	漸戸・美濃	志野皿	反	(11.6)			灰白	大窯第4段階後半	
20	61	III区	SK23	石製品		不明		2.3	14.7	1.8	灰	「成子」刻印2箇所あり	
20	62	III区	SX01	土師器		かわらけ	反	(9.8)	2.9	(6.8)	灰白		
20	63	III区	SX02	土師器		かわらけ	反	(11.0)	2.3	(7.8)	にぶい黄褐色		
20	64	III区	SX02	土師器		かわらけ	反	(11.4)	2.8	(8.2)	灰白		
20	65	III区	SX02	铁滓		碗形弔		11.9	10.3	2.2	赤褐色		
20	66	III区	SX02	铁滓		碗形弔		11.2	8.9	1.9	赤褐色		
21	67	III区	SP10	土師器		かわらけ	反	(10.8)			灰白		
21	68	III区	SP21	土師器		かわらけ	10.8	3.4	6.4		淡黄		
21	69	III区	SP26	土師器		灯明皿	反	(10.4)		(6.8)	にぶい褐色	煤付着	
21	70	III区	SP29	陶器	漸戸・美濃	丸皿	反		(5.8)		灰白	大窯第2～3段階	
21	71	III区	SP29	直邊器		坏蓋	反			(17.8)	灰		
21	72	III区	SP58	陶器	漸戸・美濃	天目碗	反	(10.8)			にぶい褐色	登窯第4小期	
21	73	III区	3次調査 試掘坑7	陶器		中皿	反			(5.6)	淡黄	登窯第1～2小期	
21	74	III区	3次調査 試掘坑7	陶器		志野皿	反			(5.4)	淡黄	登窯第1～2小期	
21	75	III区	3次調査 試掘坑5	陶器	志戸呂	大皿	反	(24.8)			褐色	大窯第4段階	
21	76	III区	3次調査 試掘坑1	陶器	肥前	香炉					灰白		
21	77	III区	表土	瓦		丸瓦							
21	78	III区	表土	土製品		羽口					褐色		
24	79	IV区	SK01	陶器	不明	碗					灰白		
24	80	IV区	SK01	土師器		熔塔	反	(25.8)			にぶい褐色	煤付着	
24	81	IV区	SK01	土師器	在地	熔塔	反	(21.8)			にぶい褐色	煤付着	
24	82	IV区	SK01	瓦		丸瓦					灰		
24	83	IV区	SK01	金属製品		刀子		1.0	(15.8)	0.3	赤褐色		
24	84	IV区	SK01	金属製品		鉄貨			2.4		灰黒	熙寧元宝(初鋤1068年)	
24	85	IV区	SK02	陶器	漸戸・美濃	天目碗	反	(11.1)			淡黄	登窯第2小期	
24	86	IV区	SK02	陶器	志戸呂	搖鉢	反	(28.4)			褐色		
24	87	IV区	SP01	土師器		かわらけ	反	(9.2)	2.0	(6.4)	淡黄白		
24	88	IV区	表土	陶器	漸戸・美濃	内壳皿	反	(10.5)	2.0	(3.0)	淡黄	大窯第3段階後半	
24	89	IV区	表土	陶器	美濃	菊花皿	反	(13.0)	3.2	(7.0)	淡黄	登窯第3～4小期	
24	90	IV区	表土	土師器		かわらけ	反	(12.3)	2.6	(8.2)	淡黄白		
24	91	IV区	表土	金属製品		鉄貨			2.5		灰黒	寛永通宝(古寛永)	
24	92	V区	SP06	金属製品		鉄貨			2.5		灰黒	祥符元宝(初鋤1008年)	
28	93	V区	SP06	金属製品		鉄貨			2.4		灰黒	皇宋通宝(初鋤1039年)	
28	94	V区	SP12	陶器		山茶碗	反	(15.2)	5.1	(7.4)	褐色	源美5期	
28	95	V区	SP13	陶器		山茶碗	反	(15.0)			灰	源美4～5期	
30	96	V区	SD02	陶器	漸戸・美濃	天目碗	反	(12.0)	5.8	(3.4)	淡黄	大窯第4段階後半	
30	97	V区	SD02	陶器	漸戸・美濃	丸碗				3.1	灰白	登窯第5～6小期	
30	98	V区	SD02	陶器	志戸呂	小皿		10.4	2.6	4.3	灰		
30	99	V区	SD02	陶器	志戸呂	小皿	反	(9.9)	2.1	(5.3)	灰黄	大窯第4段階	
30	100	V区	SD02	陶器	漸戸・美濃	折線皿	反	(9.8)	2.5	(5.2)	淡黄	大窯第4段階前半	
30	101	V区	SD02	陶器	漸戸・美濃	黄漸戸耳杯	反	(28.8)			灰白	登窯第1小期	
30	102	V区	SD02	陶器	志戸呂	搖鉢	反	(28.8)			にぶい褐色	大窯第4段階	

Fig.	番号	地区	構造	種別	産地	細別	反転 復元	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	色調	備考
30	103	V区	SD02	陶器	常滑	壺	反			(11.8)	明赤褐色	
30	104	V区	SD02	陶器	志戸呂	瓶類?	反			(10.8)	褐灰	
30	105	V区	SD02	土師器		灯明皿	反	(11.7)	2.5	(4.0)	灰白	
30	106	V区	SD02	土師器		灯明皿	反	(9.7)	2.6	(6.0)	灰白	
30	107	V区	SD02	土師器		かわらけ		10.5	2.9	6.7	灰白	
30	108	V区	SD02	土師器		かわらけ		11.3	2.8	6.6	浅黄橙	内面に押汗痕あり
30	109	V区	SD02	土師器		かわらけ	反	(10.5)	2.7	(6.0)	灰白	
30	110	V区	SD02	土師器		かわらけ	反	(10.6)	2.3	(7.2)	に赤い斑	
30	111	V区	SD02	土師器		かわらけ	反	(10.2)	2.9	(6.0)	灰白	
30	112	V区	SD02	土師器		かわらけ	反	(10.5)	2.2	6.4	灰白	煤付着
30	113	V区	SD02	土師器		かわらけ	反	(12.7)	2.7	(9.0)	灰白	
30	114	V区	SD02	土師器		燈籠	反	(21.8)		(19.5)	淡黄	
30	115	V区	SD02	土師器		燈籠	反	(27.2)			に赤い黄橙	
30	116	V区	SD02	土師器		燈籠	反	(21.6)			淡黄	
30	117	V区	SD02	土師器		風炉					灰白	
30	118	V区	SD02	土師器		煙炉 or 風炉					に赤い黄橙	
30	119	V区	SD02	瓦						2.1	灰	
31	120	V区	SK02	陶器	瀬戸・美濃	天日窯	反			(3.8)	灰白	登窯第3～4小期
31	121	V区	SK04	陶器	瀬戸・美濃	天日窯	反	(12.0)			灰白	釉：黒褐色、登窯第3小期
31	122	V区	SK04	陶器	瀬戸・美濃	丸輪	反	(10.8)			灰黄	釉：灰黄色、登窯第1小期
31	123	V区	SK04	陶器	志戸呂	小皿	反	(7.9)	1.8	(3.6)	黒褐色	釉：灰オーブグリーン、大窯第4段階
31	124	V区	SK04	陶器	常滑	甕	反	(40.8)			暗褐色	
31	125	V区	SK04	陶器	常滑?	甕					灰褐色	
31	126	V区	SK04	土師器		かわらけ	反	(9.9)		(5.8)	灰白	
31	127	V区	SK04	土師器		かわらけ	反	(10.6)	3.1	(4.9)	灰白	
31	128	V区	SK04	土師器		燈籠		21.8		17.1	に赤い黄橙	煤付着
31	129	V区	SK08	陶器	瀬戸・美濃	天日窯	反	(11.0)			淡黄	釉：黒褐色、大窯第4段階前半
31	130	V区	SK08	陶器	志戸呂	楕鉢	反			(11.0)	褐灰	大窯第4段階
31	131	V区	SK08	土師器		不明		(29.6)			灰黄	
31	132	V区	SP21	陶器	瀬戸・美濃	志野織部里	反			(7.4)	淡黄	登窯第1小期
31	133	V区	表土	陶器	初山	天目碗	反	(13.0)			褐灰	釉：褐色、大窯第3段階後半
31	134	V区	擾乱	陶器	瀬戸・美濃	天目碗	反	(12.0)			褐灰	釉：褐色、大窯第4段階後半
31	135	V区	7層	陶器	瀬戸?	天目碗	反	(11.4)			灰白	釉：黒褐色、亞窯第4小期
31	136	V区	北壁	陶器	志戸呂	端反碗	反	(11.2)			褐	釉：暗茶褐色
31	137	V区	擾乱	陶器	初山	九皿	反	(10.8)			灰	
31	138	V区	3層	陶器	美濃	志戸呂茶碗						登窯第6～7小期
31	139	V区	擾乱	陶器	志戸呂	半筒碗	反	(7.0)	5.3	(3.8)	灰	
31	140	V区	擾乱	陶器	初山	小皿	反	(10.7)	2.2	(6.0)	灰白	釉：暗赤褐色、大窯第3段階後半
31	141	V区	13層	陶器	初山	皿	反	(11.0)	6.8	(5.6)	灰白	釉：黒褐色、大窯第3段階後半
31	142	V区	3層	陶器	美濃	鉢鉢	反			(18.8)	褐灰	登窯第3～4小期
31	143	V区	擾乱	陶器	常滑	甕	反	(13.6)			に赤い褐	
31	144	V区	擾乱	陶器	常滑	壺	反	(14.0)			褐灰	
32	145	V区	擾乱	土師器		かわらけ		9.3	2.4	6.0	浅黄橙	
32	146	V区	3層	土師器		かわらけ		8.8	2.2	5.4	浅黄橙	
32	147	V区	3層	土師器		かわらけ	反	(12.0)	2.6	(7.8)	浅黄橙	
32	148	V区	3層	土師器		かわらけ		8.4	2.6	4.8	浅黄	
32	149	V区	3層	土師器		かわらけ		8.0	2.5	4.2	灰白	
32	150	V区	3層	土師器		かわらけ		7.8	2.3	4.6	浅黄	
32	151	V区	擾乱	土師器		かわらけ		9.4	1.9		灰白	
32	152	V区	3層	土師器		かわらけ	反	(10.0)	1.0	(5.6)	浅黄	
32	153	V区	擾乱	土師器		燈籠	反	(28.2)			褐	
32	154	V区	擾乱	土師器		燈籠	反	(23.6)			褐	
32	155	V区	擾乱	土製品		土罐		2.8	6.6	2.8	浅黄橙	

第3章 総括

(1) 発掘調査の成果

浜松城下町遺跡5次調査は、近世の浜松城に伴う城下町の南端部分を対象として実施した発掘調査である。本調査では、古代、鎌倉時代、戦国時代末～近世（城下町）の遺構や遺物を確認し、現在の浜松市中心市街地の形成過程をうかがい知るうえで重要な成果を得た。

古代 8～9世紀にかけての遺構や遺物が少量確認できた。浜松城下町遺跡ではこれまでの発掘調査や工事立会によって、須恵器や土師器が出土することが知られていた。今回の調査では奈良時代と捉えられる遺構も確認でき、奈良時代に集落が展開していたことが明らかになった。

鎌倉時代 浜松城下町遺跡の北東部では、鎌倉時代には中世都市「ひくま」が形成されていることが知られている。今回の発掘調査により、浜松城下町遺跡の南側地区にも、鎌倉時代の集落が展開していることが明らかになった。

中世末～近世 これまで、浜松城下町遺跡南部における近世の浜松城下町へと続く城下町の形成時期は、寺社の移転の記録などから天正年間と推定されてきた（太田 1996・鈴木 2014）。本調査により、大窯第3段階後半に位置づけられる遺構や遺物が確認でき、浜松城下町遺跡の南部地域における城下町の形成時期が、16世紀後葉に遡ることが明確になった。また、陶器の生産地に着目すると、近世城下町では、瀬戸窯産と美濃窯産の製品が主体といえるが、城下町の形成期には、初山窯産の製品が主体的である。

(2) 発掘調査の意義と展望

浜松城に伴う城下町の南部地域の形成時期が、16世紀後葉に遡ることが明らかになった。また、城下町形成期には、大窯第3段階後半を中心とした時期に開窯・操業した初山窯（栗原 2005）の製品が多いことが特筆できる。浜松城下町遺跡における資料数の充実を待って分析・検討を行う必要があるが、大窯第3段階の遠江西部における産地別の搬入量は、瀬戸美濃産陶器の流入量が減少したのではなく、純粹に初山窯産の流入量が増えているとされる（藤澤 2005）。初山窯の開窯の背景には、城下町の整備に起因する陶器需要の拡大があったと推察できる。徳川家康による浜松城とその城下町の整備、窯業を中心とした手工業生産を通じた領国経営を考える上で、重要な調査成果と言える。

浜松城下町遺跡における発掘調査は、これまで限られた部分で実施されているが、浜松の中心市街地の形成過程をうかがい知る上で重要な成果が多く得られている。今後の発掘調査の進展を待つて、精緻な分析と文献史料を踏まえた多面的な検討が必要と言える。

引用・参考文献

- 大庭康二 1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
加藤理文 1994『浜松城をめぐる諸問題』『地域と考古学』向坂鋼二先生追憶記念論文集
太田好治 1996『浜松城跡－考古学的調査の記録－』浜松市教育委員会
栗原雅也 2005『初山焼』『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編 菊川シンポジウム実行委員会
藤沢良祐 2005『瀬戸美濃と志戸呂・初山』『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編 菊川シンポジウム実行委員会
藤澤良祐 2007『総論』『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 濱戸系』愛知県
鈴木一有 2014『遠江における守護所と城下町の様相』『新・清洲会議 資料集』新・清洲会議実行委員会

図 版
PLATE



III区 全景（北東から）



1 I 区 南半完掘全景（南から）



2 I 区 北半完掘全景（南西から）



3 I 区 SX01 土層堆積状況（東から）



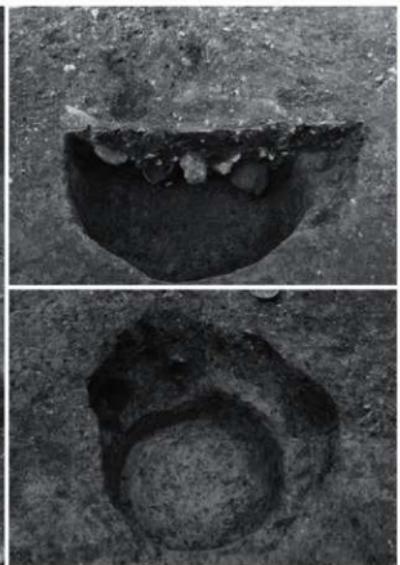
4 I 区 SE02 土層堆積状況（南西から）



1 II区 完掘全景(北から)



2 II区 SD01 完掘状況(南から)



3 II区 SK05 遺物出土状況・完掘状況(南から)



1 II区 SK06遺物出土状況（南から）



2 II区 SK10（左）SK09（右）完掘状況（南東から） 3 II区 SX01 完掘状況（東から）



4 II区 SX02 検出状況（南から）



1 III区 完掘全景(北から)



2 III区 完掘全景(南から)



1 III区 西壁土層堆積状況中央部（東から）



2 III区 SK05遺物出土状況（北から）



3 III区 SK24 完掘状況（東から）



4 III区 SX01 完掘状況（西から）



5 III区 SX02 完掘状況（南から）



1 IV区 完掘全景(北から)



2 IV区 西壁土層堆積状況(東から)



3 IV区 SK01 遺物出土状況(北から)



1 V区 完掘全景(北東から)



2 V区 北壁土層堆積状況(南から)



1 V区 東壁土層堆積状況（南西から）



2 V区 SD02完掘状況（西から）



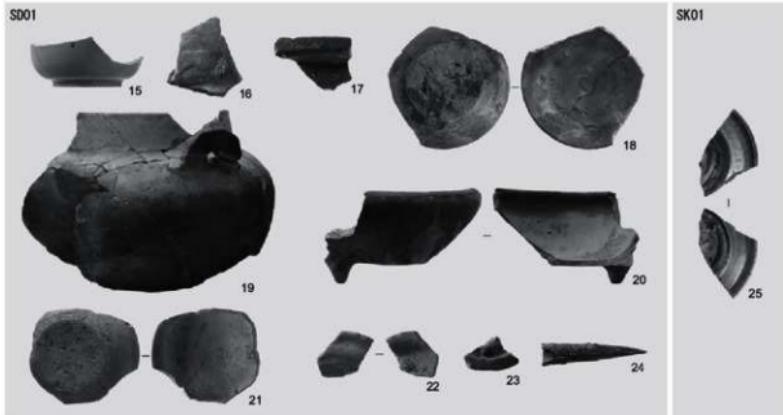
3 V区 SK04遺物出土状況（南から）



4 V区 SP12遺物出土状況（東から）



1 I 区 出土遺物



2 II 区 出土遺物 (1)

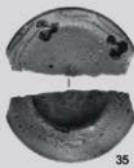
SK05



SK06



SK09



SP07



SP08



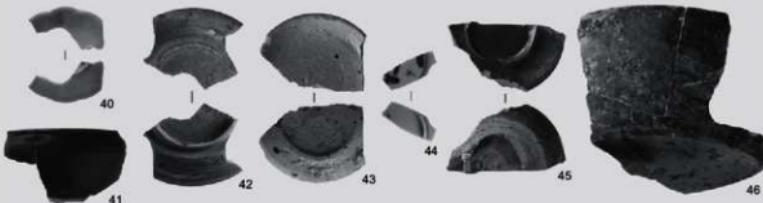
SP24

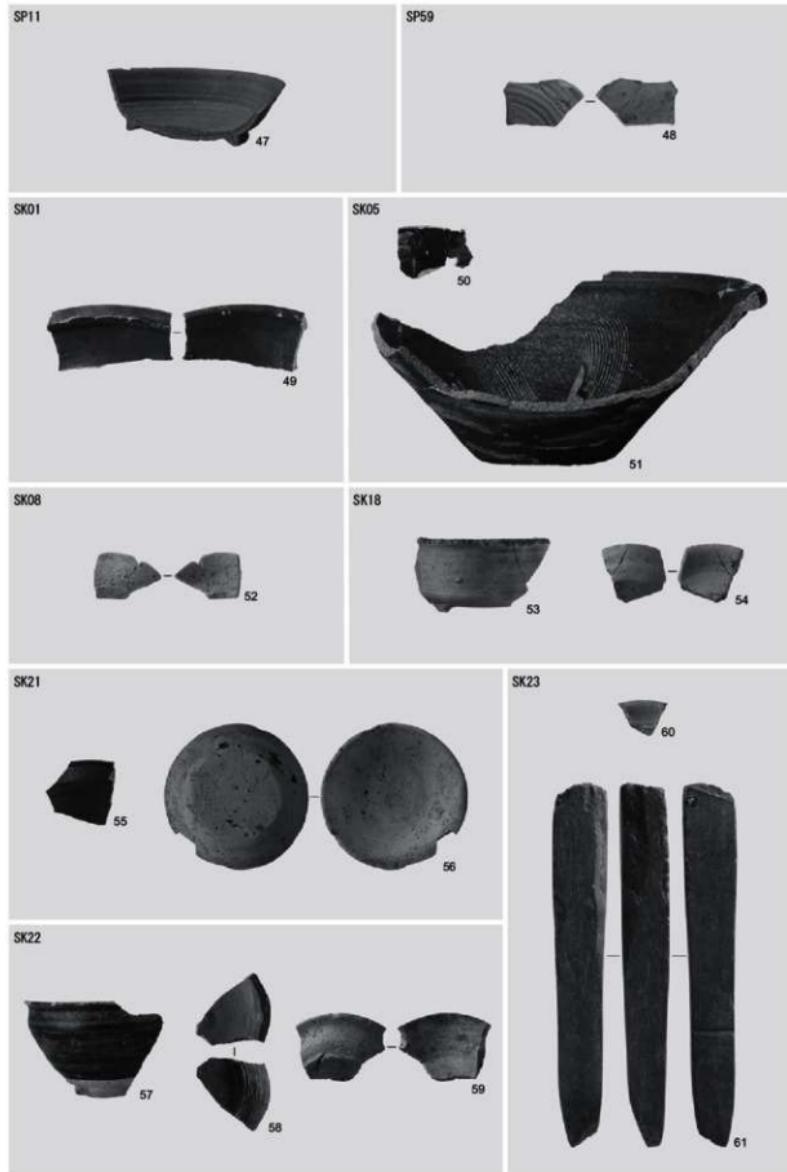


SP33



遺物外





SX01



SX02



SP10



SP21



SP26



SP29

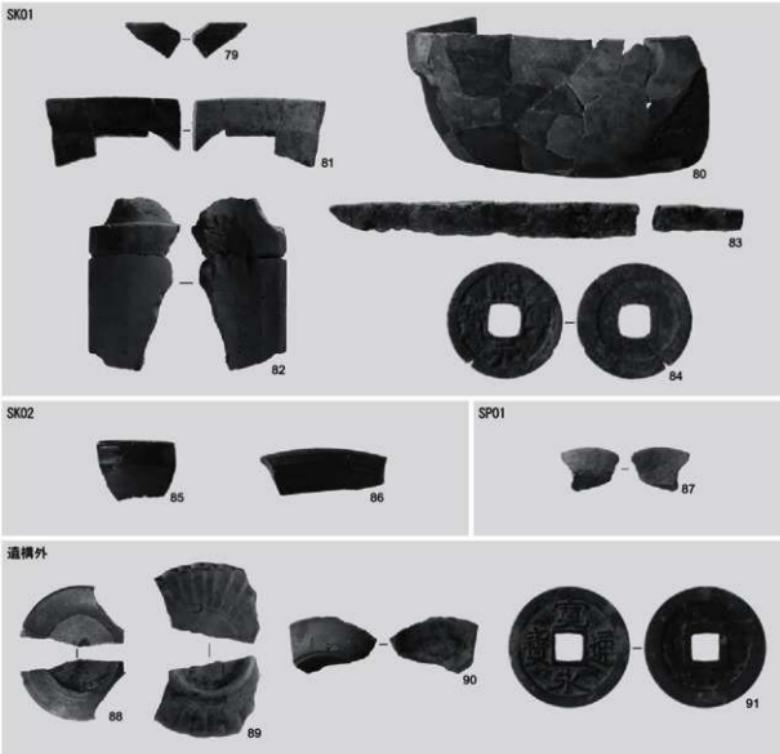


SP58

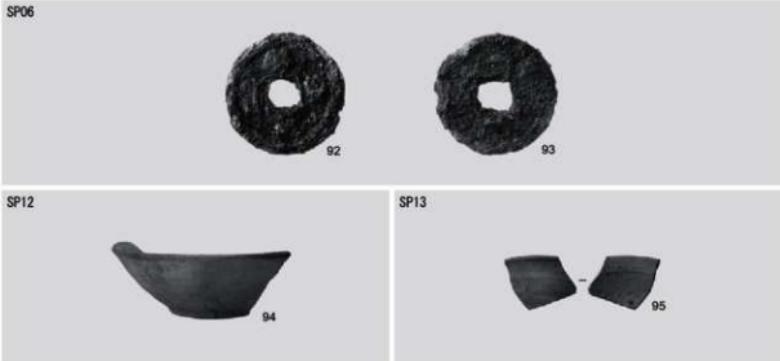


造構外



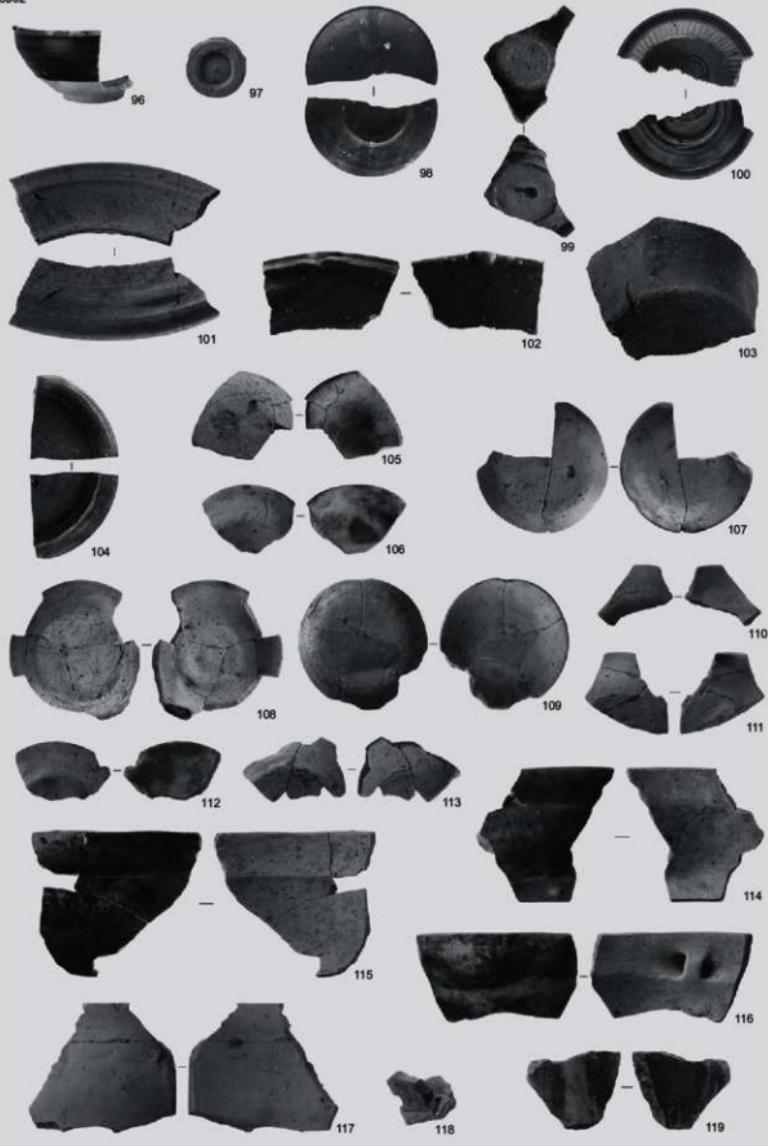


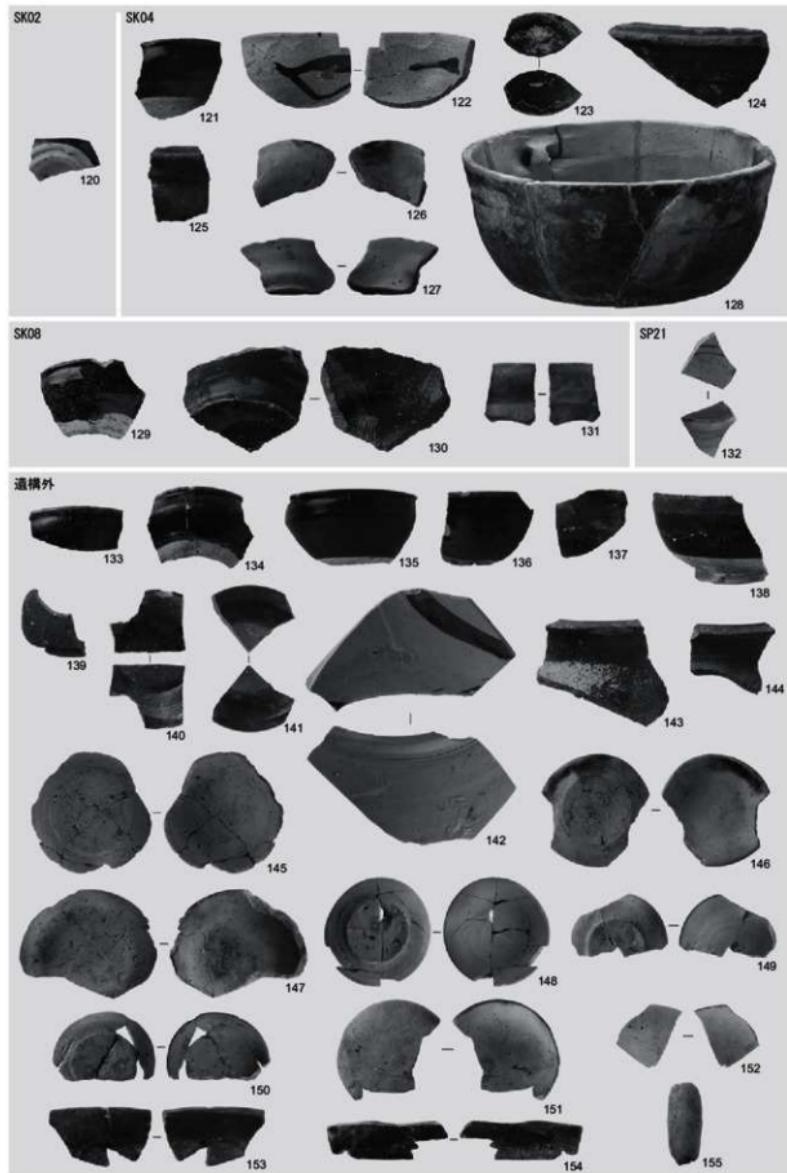
1 IV区出土遺物



2 V区出土遺物（1）

SD02





V区出土遺物 (3)

報告書抄録

書名(ふりがな)	浜松城下町遺跡(はままつじょうかまちいせき)							
編著者名	和田達也、閑美男(編)							
編集機関	浜松市教育委員会 ☎ 430-0929 浜松市中区中央1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市民部文化財課(浜松市教育委員会の補助執行機関) ☎ 430-8652 浜松市中区元城町103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (053) 457-2563							
発行機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2017年3月24日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はままつじょうかまちいせき 浜松城下町遺跡	静岡県 浜松市中区 成子町・塩町	22131	14-18	34度 42分 01秒	137度 43分 38秒	2016年 9月21日 ～ 11月30日	509.84 m ²	国道257号 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項				
浜松城下町遺跡	城下町	戦国時代 江戸時代	陶器 磁器					

浜松城下町遺跡

2017年3月24日

編集機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
〒430-8652 浜松市中区元城町103-2

発行機関 浜松市教育委員会
印 刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷
